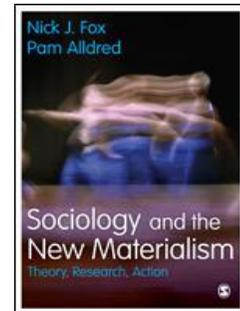


REVIEW ESSAY

Nick J. Fox and Pam Alldred, 2017

Sociology and the New Materialism: Theory, Research, Action

London: Sage.



新しい物質主義的 sociology に向けて

——本質主義と構築主義を超えて——

森 啓輔・岩館 豊・植田 剛史

1 はじめに——本稿の課題と目的

本稿は、Nick J. Fox and Pam Alldred, 2017, *Sociology and the New Materialism*, London: Sage (以下、引用に際してはSNMと略記)の書評を通して、社会学的研究に新しい物質主義 (new materialism)¹を適用することと、それが社会的なもの (the social) の物質的側面に迫りうる新たな社会学的アプローチを切り開く可能性について論じるものである²。後に詳述するように、本書が依拠する新しい物質主義は、既存の社会学的研究の認識論的前提に対する近年のラディカルな挑戦のひとつである。こうした挑戦を社会学が引き受けることで、いかなる可能性が新たに開かれ、またそこにはいかなる困難が伴うのか。本稿は、本書が掲げる研究理念としての新しい物質主義、本書が試みる研究実践としての新しい物質主義の社会学的適用、そして本書が新しい物質主義のもとで再定義する社会学の自己像をそれぞれ検討し、こう

した問題について考察する。

本稿の構成は次のとおりである。第1に、本書の章構成を紹介し (第2節)、本書がその理論的前提として依拠する新しい物質主義とは何かを、本書が依拠する4つの理論的系譜に焦点を当てて明らかにする (第3節)。第2に、本書の提起する新しい物質主義的 sociology が、いかにして新しい物質主義を社会学的な諸前提および諸視点に適用していくのかを理論的に検討する (第4節)。第3に、具体的な社会学的研究主題において、新しい物質主義的 sociology がいかに適用可能なのかを、本書第1部 (第3・4章) および第2部 (第5・7章) の事例を用いて論じる (第5節)。第4に、新しい物質主義を社会学なる営みへと再帰的に適用したとき、社会学なるもののあり方はどう変わるのかについて、本書第3部 (第9・10章) の検討にもとづいて論じる (第6節)。

2 本書の章構成および概要

まず、著者のニック・J・フォックスとパム・アルドレッドについて短く紹介しよう³。フォックスは、イギリス・シェフィールド大学の医療および関連研究学部（School of Health and Related Research）の社会学名誉教授である。関心領域は、健康、セクシュアリティ、感情、創造性および社会調査法などであり、これに新たな物質主義とポスト人間主義的アプローチを適用することを試みてきた。アルドレッドは、同じくイギリスのブルネル大学臨床学部准教授である。社会学と青年研究を専門とし、セクシュアリティ、セックスと親密な関係性の教育、性暴力、子供と青年の世界観、社会的不平等に直面したレズビアンおよび若い母親、教育と社会政策問題などを対象に研究している。本書は、著者の関心領域に新しい物質主義の想像力を導入した構成となっている。また本書は、教科書として執筆されたものである。著者はこれに自覚的であり、「新しい物質主義的社会学の初めての教科書であると信じており、そのため可能な限り使えるように作成した」（SNM: 12）と述べる。さらに、教科書にありがちな、対象を過度に単純化するリスクを意識しつつも、新しい物質主義的社会学の世界を深く探究したい読者のために、さらなる読書のための案内・引用・手引きを各章に掲載しており、昨今急増する新しい物質主義的なアプローチを用いた論文や著作に触れる機会を本書の随所にちりばめている（SNM: 13）。また巻末には、本書で用いられる専門用語集も収録されている。

本書は、大きく3部から構成されており、理論的なマニフェストの後に実証研究への有用性が示される構成となっている。章構成は表1のとおりである。第1部「新しい物質主義と

社会学的想像力（New Materialism and the Sociological Imagination）」では、第1章「イントロダクション(Introduction)」と第2章「基盤：新しい物質主義と社会学的想像力(Foundations: New Materialism and the Sociological Imagination)」において、本書の根幹となる理論的立場が打ち出されている（第3・4節で詳述）。続く第3章「環境：人間、ポスト人間、そして環境社会学（Environment: Humans, Posthumans, and Ecological Sociology）」では、新しい物質主義の社会学的想像力を用いながら、自然的なものとの社会的なものとの間の相互行為や、既存の社会学的二元論を越えていく方法について論じられる。また第4章「社会：システム、構造、階層化を超えて（Society: Beyond Systems, Structures and Stratification）」では、ラトウールの「アソシエーションの社会学」の概念やドゥルーズ＝ガタリ主義のアセンブラージュ⁴概念に基づいて、社会学におけるいくつかの重要概念が再考される。そこでは構造主義に見られる理論偏重で上意下達な概念化から始まる演繹的研究スタイルよりも、集合体（aggregation）としての社会内部で生起する継続性や変化が分析の中心となり、構造や階級などのマクロ概念は、具体的な分析の結果として説明されるべき被説明変数であるという立場が表明される。

第2部「新しい物質主義を社会学的に適用する（Applying New Materialism Sociologically）」では、著者の専門領域を中心に、第5章「創造性：想像力、社会的生産、社会的変革（Creativity: Imagination, Social Production and Social Change）」、第6章「セクシュアリティ：欲望、強化、生成（Sexuality: Desire, Intensification, Becoming）」、第7章「感情：身体化、継続性、変革（Emotions: Embodiment, Continuity and Change）」、第8章「健康：有機的体を超えて

表1 SNMの目次

| 章数 | タイトル | 詳細 |
|--|---|--|
| | About the Authors | |
| Part1 New Materialism and the Sociological Imagination | | |
| 1 | Introduction | Materialism re-booted / Why a new materialist sociology? / Challenges for a new materialist sociology / Structure of the book |
| 2 | Foundations: New Materialism and the Sociological Imagination | New Materialism: four voices / Propositions for a new materialist sociology / Applying the new materialist imagination sociologically / The micropolitics of social production |
| 3 | Environment: Humans, Posthumans and Ecological Sociology | Sociology, humans and the environment / Evidencing anthropocentrism: health and the environment / Environmental sociology: beyond anthropocentrism, toward the posthuman / Materialism sociology and 'sustainability' |
| 4 | Society: Beyond Systems, Structures and Stratification | Materialism and the 'sociology of association' / Social organization / Social institutions / Structures, systems and mechanisms / Social stratification: differentiation or aggregation? / The micropolitics of social divisions |
| Part2 Applying New Materialism Sociologically | | |
| 5 | Creativity: Imagination, Social Production and Social Change | Creativity and production / Creativity and the sociological imagination / The artwork made me do it: materialist rumblings / Towards a materialist view of creativity / Four proposition for a sociology of creativity / Is 'creativity' special? / Creativity and social change |
| 6 | Sexuality: Desire, Intensification, Becoming | Sexuality from biomedicine and religion to the cultural turn / Materialism and the 'sexuality-assemblage' / The micropolitics of sex and sexualities / The sexualities of young men / 'Sexuality is everywhere'? |
| 7 | Emotions: Embodiment, Continuity and Change | Sociology and the study of emotions / Emotions and affect / The love-assemblage / Emotions, social continuity and social change |
| 8 | Health: Beyond the Body-with-Organs | Re-materializing health / The ill-health assemblage / The 'health' assemblage / The micropolitics of health / Health and technology: cyborgs and citizen health / Personal health technologies / Posthuman health |
| Part3 Research, Policy and Activism | | |
| 9 | Research: Designs, Methods and the Research Assemblage | Materialism and social inquiry / The research assemblage / A materialist analysis of the research encounter / Dis-assembling social research / The micropolitics of social inquiry / Re-engineering methodology |
| 10 | Change: Action, Policy, Social Transformation | Social action, power and resistance / The micropolitics of politics and policy / Materialism and activism / Conclusion: an engaged sociology of materiality |
| | Glossary | |
| | Bibliography | |
| | Index | |

(Health: Beyond the Body-with-Organs)」という4つの研究主題がとりあげられ、第1部の理論的立場が社会学的研究対象へと実際に適用され、展開される。

第3部「リサーチ、ポリシー、そしてアクティヴィズム (Research, Policy and Activism)」では、新しい物質主義的立場から社会調査について論じられている。アセンブラージ概念を用いた社会調査の設計、方法、そして社会調査自体の編成についての存在論的立場が第9章「リサーチ：デザイン、方法、リサーチ・アセンブラージ (Research: Designs, Methods and the

Research Assemblage)」で展開され、第10章「変革：行為、政策、社会的転換 (Change: Action, Policy, Social Transformation)」では、社会学という「業界」の外部に出て関与することにおいて、新しい物質主義的立場が有用であることが示される。とりわけ青年とポルノグラフィーをめぐる著者自身のフィールドワークにおいて経験されたことが随時参照される。すなわち、運動当事者側が動員する（あるいはせざるを得ない）本質主義的立場と、これまでのジェンダー・セクシュアリティ研究が保持していた構築主義的立場との間の緊張関係を考察するなかで、新

しい物質主義が本質—構築主義的分化を突破する可能性をもつことが述べられる。

これらの全体を通して新しい物質主義的社会学が挑戦すべき課題とは、「人間社会と文化を理論化し、社会学的関心のある問題を対象とする研究に影響を与え、そして変革のための社会的行為と社会的世界の強化のための基盤を供給する際に使用されるような、実行可能な社会学を打ち立てること」(SNM: 9) であるとされる。特に本書が掲げるのは、次の6つの問いである (SNM: 9-10)。

1. 連続性 (continuity)：いかにして社会と文化は、社会的編成の安定した物質的レベルを、それを作り上げる人間の移り変わり (turn-over) からは一見独立したかのように、時間の経過と共に持続させるのか (cf. 国民国家、民主主義、資本主義、ローカルおよびリージョナルな特徴とアイデンティティ、ジェンダー役割)。そして、何が説明されなければならない物質のプロセスなのか。
2. 変化 (change)：連続性の一方、社会と文化は変化し、時には劇的に変わる。どのような物質のプロセスが社会的変化を生み、どのように社会的連続性を支えるプロセスと自らを調停するのか。
3. 社会的区分と不平等 (social divisions and inequality)：我々の生きる社会的世界は様々な社会的区分 (cf. ジェンダー、人種、社会的階級等) によってどうしようもなく分断され、こうした区分に沿って不平等が存在するように見える。どのようにしてこれら区分と不平等は持続するのか。
4. 権力と抵抗 (power and resistance)：特定の諸個人 (君主や独裁者など) や社会内部の特定の要素 (社会的階級やジェンダー)、

あるいは社会的グループ (労働組合や管理チーム) は、どのようにして他者に対する力をもつのか。そして逆に、いかにしてその他の者たちは権力行使に抵抗するのか。

5. 主観性 (subjectivity)：社会と諸個人内部の思考、感情、そして行為の関係はどのようなものであり、互いにどのように影響しあうのか。これらは社会学的展望からどのように理解できるか。
6. 社会的なもの (the social)：社会について、社会学者は様々な理解してきたが、社会学者が論じてきた「社会的なもの」は、個々の人間がもつ認識や感情、あるいは生物学、化学、物理学的な領野へと単純に還元できるものではない。では、それは何なのか。

3 新しい物質主義のラディカリズムと4つの理論的系譜

新しい物質主義は、近年学際的な幅を見せながら世界的に展開している潮流の総体として見る事ができる。そのなかでも社会学領域において比較的知られている潮流としては、レヴィ・ブライアントやグレアム・ハーマン、そしてクァンタン・メイヤスーなどによる反新カント派哲学として登場した思弁的实在論 (speculative realism) (Bryant, Srnicek and Harman eds. 2011)、ブルーノ・ラトゥール (Latour 1992=2008, 2005) やミシェル・カロン (Callon 1986) に代表されるアクター・ネットワーク理論 (以下 ANT と略記)、ニコラス・ローズ (Rose 1999, 2007) やトーマス・レムケ (Lemke 2012, 2015) などに代表されるフーコー主義的統治性研究、あるいはスティーヴン・グレイアム (Graham 2009) やコリン・マクファアール

ン (McFarlane 2011a, 2011b) などに代表される、人間と非人間の共編成としての都市的なものを強調し都市インフラと人間の関係性に注目した都市研究におけるアセンブラージ学派が挙げられる。この意味において新しい物質主義は、領域横断的かつ複雑な諸議論の総体である。

著者は自身の研究関心領域に基づき、上記を含むより広い潮流としての新しい物質主義研究から独自に系譜を引き出しながら、新しい物質主義を社会的に摂取しようと試みている。具体的には「ANT、人工知能、生物哲学、進化論、フェミニズム、フーコー主義系譜学、神経科学、非一表象理論 (non-representational theory)⁵、ポスト人間主義⁶、クィア理論、量子物理学、そしてスピノザ主義的一元論」(SNM: 14) などの／などを用いた研究領域である (Anderson and Harrison 2010; Ansel-Pearson 1999; Barad 1996; Best 1995; Braidotti 2006, 2013; Clough 2008; Connolly 2011; Coole and Frost 2010; Deleuze 1988; Grosz 1994; Haraway 1991; Latour 2005; Massumi 1996; Spinks 2001; Thacker 2005)。これらの研究は、アイデンティティや人間のニーズへの関心から、国際経済やエコロジーの諸力までの広範な領域を対象としている (SNM: 14; Coole and Frost 2010: 28)。だが、こうした広範な関心にもかかわらず、著者の本書での目的は明確で、「我々の第1の課題は、(多くが社会科学の外側で展開してきた) しばしば抽象的な新しい物質主義的な理論展望と諸概念を、社会学者の特定の需要に合致するようなアイデアと道具として翻訳すること」(SNM: 10) であると述べる。これをうけて、新しい物質主義的思考が社会学的研究の対象 (人間社会と文化) を変革する方法が本書で紹介される。

本書によると、新しい物質主義のラディカル

さとは、次の3つの前提にある (SNM: 4)。すなわち、

- 物質的世界とその内容は固定された安定的総体ではなく、関係的で不規則 (uneven) で、絶えず流動的である (Barad 1996; Coole and Frost 2010: 29; Lemke 2015)。
- 「自然」と「文化」は区別される領域として扱われるべきではなく、物質性の連続における一部分として扱われるべきである。物質的なもの (the physical) と社会的なもの (the social) はともに、常に変化する世界における物質的効果である (Braidotti 2013: 3; Haraway 1997: 209)。
- 「エージェンシー」の能力——社会的世界を生産する諸行為——は、人間アクターから非人間および無生物アクターへと拡張される (Braidotti 2013; DeLanda 2006; Latour 2005)。

安定性から流動性へ、文化から自然—文化の連続性へ、そして人間アクターから非人間アクターを含めた生産能力への注目、これらが著者が新しい物質主義を社会学に動員する理由である。より具体的に言い換えると、(1) 諸個人と人間主体への注目から、生物と無生物の関係のネットワークないしアセンブラージがどのように影響しあっているのかへと社会学の焦点を移行させる点 (SNM: 4; DeLanda 2006: 4; Mulcahy 2012: 10; Youdell and Armstrong 2011: 145)、(2) 社会的世界の生産は、欲望や感情や意味などの情動 (affection) を含めた広範な諸力によりなされると認識する点 (SNM: 4-5; Braidotti 2000: 159; DeLanda 2006: 5)、そして (3) 人間の関係のみを特権化することな

く、自然と社会的環境も関係性に組み込むような、ポスト人間的視点 (Braidotti 2006: 37, 2013: 169) から社会的問いを提出する点である (SNM: 5)。(1) から (3) はすなわち、社会的なものの分析を、人間主体のみに限定された分析から、人間により作られた社会に埋め込まれている、人間・非人間・無生物の関係性の分析に移行する挑戦として要約することができる。

本書については、新しい物質主義の潮流のなかでも、以下4つの系譜を組み合わせるところにその独自性がある(以下第2章、SNM: 15-22の内容に沿って記述する)。第1に、ブルーノ・ラトゥールに代表されるANTである。ANTは元来、ミシェル・カロンの帆立貝の仕事(Callon 1986)やラトゥールの非近代論(Latour 1992=2008)のように科学技術社会論(STS)での研究がその発端としてあったが、そこから社会的アソシエーションを技術実践や非人間アクターも含めた編成としてとらえる視座へと展開する。つまり、いかにして物理的、生物的、経済的、言語的、そしてその他の諸領域が組み合わせられ、特定の社会的集合体(aggregation)(Latour 2005: 5-6)が形成されるのかが考察される。ラトゥールらの仕事はすでに広く紹介されているため、詳しい説明は不要であろう⁷。

第2に、芸術学、人文学、教育学や地理学などの社会科学領域には影響を与えたが、社会学ではあまりその傾向は見られないドゥルーズ＝ガタリ主義の系譜である。ANTとドゥルーズ＝ガタリ主義のアセンブラージュ論の共通点は、存在論的な関係性への注目と、影響(affect)し合う潜在的な能力としての権力モデルの強調にある(Massumi 1988: xvii)⁸。しかし、アセンブラージュ論はANTよりも徹底的に関係的な

存在論を探究している。これは、社会と文化の分析とラディカル政治との双方の課題に適用可能な、より詳細な社会的生産のミクロ物理学を可能にする。アセンブラージュ論は、人間身体やその他の物質的なもの、また社会や抽象的な総体を、関係的なものであるとみなす。これは、他の同様に偶発的で一時的な身体、モノ、観念との関係性においてしか、それぞれの存在論的地位や一体性(integrity)は生じないとする立場である。これはスピノザ的な「一元論」哲学に基づいており、そこでは超越論的、あるいは下部と上部構造や表面と深淵などのいかなる二元論も拒否される(Deleuze 1988)。アセンブラージュは、予知不可能な形で諸行為と諸出来事において展開し(Deleuze and Guattari 1988: 88)、また「習慣的(habitual)かつ非習慣的な諸結合(connections)の渾沌としたネットワークにおいて、常に流動的(flux)で異なる方法で組み合わせられる」(Potts 2004: 19)なかで展開する。アセンブラージュ論の代表的なものの1つめは、社会哲学者のマヌエル・デランダによる相互行為、組織、社会についてのものである(DeLanda 2006)。デランダは、既存のマクロミクロ双方の社会還元主義を批判するなかで、全スケールの展開する社会的アセンブラージュを対象とする社会存在論を展開し、さらに物質的／表現的(expressive)／言語的役割などが、アセンブラージュ内部の生態システムを形成するとする。

2つめは、社会科学において合理主義から不確かなものとして非難され続けていた情動も、人間社会を構成する重要な要素として見るべきだとする「情動論的転回(affective turn)」(Clough 2008; Leys 2011; Thrift 2004)の系譜である。これはジェンダーおよびセクシュアリティ研究者のパトリシア・T・クラフや、人文

地理学者のナイジェル・J・スリフトらにより展開されてきた。クラフは、スピノザやドゥルーズ主義者が情動を「行為するための身体的な能力を、増減させる前一個人的な身体的力」と定義することからさらに進み、情動の議論を通してむしろ有機体としての身体 (body-as-organism) に挑戦する「生媒介的身体 (biomediated body)」という、フーコーの生権力論に影響を受けた身体理論の形成へと議論を進める (Clough 2008: 2)。有機体的身体 (body with organs) は、19 世紀後期の再生産労働に資する身体概念だったが、生媒介的身体は現代の資本や様々な言説 (生物学、物理学、熱力学、複雑性、非線形合理性、そして身体・労働・再生産の再調整など) に媒介されながら形成されるものである (Clough 2008: 2)。つまり生媒介的身体とは、身体の定義であり、かつ身体の情動的行為可能性も意味しており、身体的な形式を与えるための物質／事態 (matter)、あるいはそれらの能力に内在的な自己組織化をめぐる政治経済的で理論的な概念を示している。他方、都市研究の文脈でのスリフトの言葉を借りれば、情動の創造と動員にまつわる諸知識は、現代都市の日常風景の統合的一部分となり、また情動的知識は政治的にも動員され、ひいては都市そのものの理解の仕方にも関わるものとなっている (Thrift 2004: 58)。これらの視点は、物質／事態とそれ自身のダイナミックで生産的な能力に再び焦点を当てることを可能にした。ドゥルーズ＝ガタリ主義の仕事はさらに、社会学の関係領域である人種 (Saldanha and Adams 2013)、セクシュアリティ (Beckman 2011)、身体 (Guillaume and Hughes 2011)、そしてリサーチ・メソドロジー (Coleman and Ringrose 2013) を対象としても展開している。人間身体とその他の物質的なものを含む物質主義は、

偶発的で移行過程にある身体、モノ、観念などと関係することを通してしか生産されない、存在論的な立場や統合なのだ。

第3に、フェミニスト量子物理学者カレン・バラッド (Karen Barad) の物質主義的存在認識論 (materialist onto-epistemology) である。バラッドの主張は、量子物理学者ニールス・ボアのコペンハーゲン解釈を通じた見解、つまり亜原子あるいは量子レベルでの測定過程の影響についての解釈に基づき展開される (Barad 2007: 198)。このレベルでの物質は、ニュートン主義／デカルト主義的な観察者の独立への期待には従わない。木から落ちるリンゴとは異なり、量子力学レベルでの物質は非連続的で不安定であり、そのため観察行為自体が亜原子相互行為の結果を決定するように見える。結果として、観察の影響を対象から分離することは不可能であり、実際に予め存在している対象、あるいは独立した対象について論じることが無意味になってしまう (Barad 1996: 169-70)。つまり「観察が非決定的な非連続相互行為に参与している以上、原則として「対象」と「観察の諸エージェンシー」のあいだを差異化する明確な方法は存在せず、固有の／自然に生じる／固定された／普遍的な／デカルト的な切断は存在しない」(Barad 1996: 170)。つまり研究実践そのものに、対象の存在生起が依存するという視点が発見されたのである。

ボアのコペンハーゲン解釈は、バラッドにより文脈的で「ローカル」な研究の展望を与えられ、エージェンシャル実在論 (agential realism) と名づけられた。エージェンシャル実在論は「(1) ローカルな経験に基づいて主張する知識に基礎付けられる。そこで客観性は文字通り具現化 (embody) されるものである。(2) 物質的あるいは文化的なものどちらか

一方のみを特権化しない。身体的生産の装置は物質—文化的で、ゆえにエージェンシャルな実在である。(3)必然的に境界化への疑問を伴い、批判的反省性を含む。そして(4)知ることをめぐる倫理の必要性を強調する」(Barad 1996: 199)。ここで従来の相互行為概念は、すでに構築されている者／モノの間の相互性を想起させるため批判され、その代わりに相互内行為 (intra-action) (Barad 1996: 179) という概念が、現象や出来事あるいは行為を形成する場そのものの概念として、新たに導入される。ゆえに現象の相互内行為は、対象と観察、自然と文化、世界と世界といった二元論の双方に不可避的に含まれる「エージェンシャルな実在」(Barad 1996: 177) を構成する。このような現象の相互内行為的な量子論的理解は、自然科学と社会科学双方に新たな問いを提出する。つまり、すべての知は状況知 (situated) であり、全ての調査・研究の設計には一定の偏りがあるということだ。科学的問いは中立的ではなく、全てのリサーチ・デザイン・方法・理論は、特定の権力的負荷の働きにより作られる「知」に反映する (Barad 2007: 185)。ゆえに、出来事と観察は同じ現象の一部を構成し、相互に構成しあう分ちがたいものとみなすこの「存在—認識論 (onto-epistemology)」は、2つの点において社会学に貢献する。すなわち、(1) 著者が「リサーチ・アセンブラージュ (research assemblage)」と呼ぶ、実在論と構築主義の認識論に二分されない存在論を提示する点、そして(2) 存在論的に自然と文化のどちらか一方が特権化されないという視点から、リサーチ・アセンブラージュにおける物質性と言説性の双方を取り上げることが可能となる点である (SNM: 20)。

第4に、社会哲学者のロッシ・ブライドッ

チ (Rosi Braidotti) のポスト人間論である。ブライドッチの批判は、フェミニズム理論やポスト・コロニアル理論を経由しながら、啓蒙期以降の人間中心主義へと向けられる。啓蒙主義は概して「人間」という範疇に基づいてそのプロジェクトが開始されたが、実際は「人間=男性」である近代西欧ブルジョアジーの知的実践として展開されてきたことが啓蒙主義批判により暴露される。啓蒙主義批判は歴史的に見ればファシズムとコミュニズムへの批判として展開し、またジャン=ポール・サルトルやシモーヌ・ド・ボーヴォワールに対する批判としても展開することになった (Braidotti 2013)。この批判の代表的なものが、ミシェル・フーコーの反—人間主義的プロジェクトであり、これは西欧男性主体の視点とは異なる位置からのプロジェクトを可能にした。フェミニズムによる啓蒙批判もこの反—人間主義的プロジェクトから展開されることになる。フェミニズムは人間=男性の批判から、人間にとっての第2の性である女性へと注目していくが、その後、女性カテゴリー内部の差異を強調する傾向にたどり着き、停滞したとブライドッチはみる。

この限界を打破すべく、「自己 (Self)」の成立の多様な条件の考察へとブライドッチは向かう。一方で人間=男性という啓蒙主義の限界を暴いた反—人間主義を評価しつつも、同時に人間主義が保持していた連帯、社会的正義や平等という進歩的達成も捨ててはならないとする (Braidotti 2013: 29-30)。これら二元論を横断するために、ブライドッチは一元的存在論において「ポスト人間主義」プロジェクトを開始する。ブライドッチ哲学は、ドゥルーズ=ガタリの「ノマドロジー (nomadology)」からもたらされた「ノマド的思考」を基盤とする (SNM: 21)。ブライドッチの身体概念は、それが法、

医学、科学などの諸言説により形成されたと考
える「言語論的転回」以降のポスト構造主義と
は異なり、生きられる／生きている身体の物質
性であり (Braidotti 2011: 130)、その延長線
上に彼女のポスト人間主義プロジェクトが存在
する。このポスト人間主義プロジェクトでは、
近代と人間主義における人種的、性的、自然
的「他者」が、マジョリティの危機とマイノリ
ティへの生成をもたらす「ポジティブで積極的
なオルタナティブ」(Braidotti 2013: 37-8) に
なると宣言する。そのためブライドッチの記述
は「動物-になること」「女-になること」「マ
イノリティーになること」といった議論で溢れ
ている (Braidotti 2013: 37-8)。哲学的ノマド
主義は、人間中心主義の傲慢さと対決するため
に、ゾーエ (生物学的生) の生産的で変革的な
諸力 (forces) と同盟を結ぶ (Braidotti 2011:
139)。このジグザグな道りににおいて、男と
女、人間と動物、マイノリティとマジョリティ
といった本質主義的二元論が挑戦され、自然界
と社会的世界の共変的な変化と生成可能性が追
求されるのである。ブライドッチ哲学の実践的
な意味は、本質主義的で有機体的な生命の概念
から遠ざかり、生成する諸力のフロー⁹や複雑
なアセンブラージュへと研究の焦点を移してい
くことにあり、ゆえに「科学」や「人文学」とい
った境界も横断していくことになるのである¹⁰。

4 新しい物質主義的 sociology

4-1 新しい物質主義的 sociology の理論的前提

本書は自らの理論的な前提の基盤を、(1)
ANT の社会-自然およびミクロー-マクロ社会
学的前提の突破、(2) ドゥルーズ=ガタリ主
義の、総体よりもアセンブラージュの、エージェ
ンシーよりも情動性の強調と、常に流動的な

(in flux) 生成するもの (becoming) としての
アセンブラージュのミクロ政治の強調、(3) カ
レン・バラッドによる、社会 (科) 学者の社会
調査実践をめぐる認識論から存在論への議論の
移行と、社会学的観察者を「出来事」として調
査内部へ位置づけ、その位置自体を調査する必
要性の提起、そして (4) ブライドッチの人文
学、社会科学および自然科学を超越するポスト
人間プロジェクトの一部としての、身体化、
主観性、エコロジーをめぐる新しい物質主義の
学問的、倫理的、政治的アジェンダに置いてい
た (SNM: 22-3)。

本書は、これら新しい物質主義の理論がもた
らす想像力を社会学に適用・実装するために求
められる視点を、以下の6点として整理して
いる (SNM: 22-8)。

第1に、「物質／事態 (matter) への注目」
である。これは先行するポスト構造主義やその
他の観念主義的 sociology 理論からの明確な峻別を
示す。つまり、新しい物質主義的 sociology の関心
は、社会的構築よりも社会的生産にあり、そ
れは物質／事態の潜勢力を分析するまでに拡
張される。その研究対象は物質／事態の能力
(capacity) であり、どのように物質／事態が相
互行為し、その他の物質的なものから影響され
／に影響し、どのように物質的諸力が世界と人
間の歴史を構成するかに関するものである。新
しい物質主義は、物質／事態の自己組織的能力
(あるいはオートポイエシス) を強調し、あ
るいはこれらの「活力」(Bennett 2010) にさ
えも注目する。ここで新しい物質主義の一元論
が意味するのは、物質／事態は存在論的に自由
(free) であるということで (Braidotti 2013:
56)、物質／事態が精神に「抵抗」しているわ
けではなく、また物質／事態にはその外部も内
部もない (SNM: 23)。

第2に、「物質／事態が何であるのかではなく、何をするのかへの注目」である。これは構築主義的思考からの離脱を意味する。構築主義的思考は、人間や意味がいかにか世界を構築するのに関心を寄せていたが、新しい物質主義はそうではない。その一方で、時空間に配置された個々人の物質的総体の多様性としての实在論的概念を単に存在論的に輸入するのでもない。身体、モノ、有機体、種などの物質性は、存在論的に所与の本質としてみなされるべきではなく、他の類似した偶発的かつ一時的な身体、モノ、思考との関係性を通してのみ、その存在論的立場と統合性が獲得されるとみなされるべきであるとされる (SNM: 24; Deleuze 1988: 13; Haraway 1991: 201)。その意味において、物質／事態が何であるのかではなく、何をするのかにより注目することになり、これを通して物質／事態そのものの能力が考察される。この関係論的存在論はスピノザ的であり、ドゥルーズ＝ガタリ的な情動の研究を開いていく。情動についてはすでに説明したが、物理的、心理的、感情的あるいは社会的なものであり、それらは生成されるものである (Deleuze and Guattari 1988: 256)。情動はまた、アセンブラージュ内において、物質／事態を他の物質／事態へと関係的につなぐものである (Blackman 2012; Deleuze and Guattari 1988: 88)。これは始動する限りにおいて機械のように作動するものであり、このアセンブラージュはクラフが述べるところの「情動のエコノミー」(Clough 2004: 15)を生産する。このアセンブラージュの存在論と情動のエコノミーの概念は、本書全体において適用される (SNM: 24)。

第3に、「人間のエージェンシーは特権化されない」という視点である。社会科学はその発足以来、人間中心主義的な視点、つまり人間

と人間の社会的、心理学的、経済的、政治的、空間的な環境における相互行為をその焦点としてきた (Berger and Luckman 1971; Giddens 1982: 11; Mills 2000[1959]: 3)。しかし新しい物質主義の社会学は、人間をその他多くの物質性のひとつとみなすことで、人間中心主義に挑戦する (Braidotti 2006: 41)。これにより、生物と無生物、人間と動物などの自然科学と社会科学の二元論を横断することが可能になり、人間中心主義的な位相から全ての物質／事態が解放される。これは社会学というエージェンシーと構造という二分法自体を横断することも可能にする (DeLanda 2006: 10)。また情動性の分析を通過すると、自然科学的物質性であるところの身体や神経系と、文化実践や社会的管理などの社会科学的物質性の間の区分も不適切になろう。この区分の意味の喪失に関しては環境を扱う第3章と健康を扱う第8章で明らかにされる (SNM: 25)。

第4に、「思考、記憶、欲望そして感情は物質的諸効果をもつ」という視点である。新しい物質主義の存在論は、自然的なものとの社会的なものの二元論を超えるため、物質と精神の伝統的の二元論も超えていく (Barad 2007: 152; Coole and Frost 2010: 26-7)。思考、観念、欲望、感情、そして集合的抽象性などは、物質的にアセンブラージュ内部で影響しあう。バラッドは現象を生産する物質と知識の相互内行為を描いたが (Barad 1996: 181-8)、ドゥルーズ＝ガタリ (Deleuze and Guattari 1988: 88) やラトゥール (Latour 2005) およびデランダ (DeLanda 2006) は、いかにして物質的かつ文化的アセンブラージュが共に身体や社会的編成および出来事を生産するのかを考察した。この視点は、昔の唯物論者の社会制度や経済的関係などのマクロ構造への排他的な注目から離脱する。つま

り、これまでは「主観的で取るにたらない現象」とされてきた出来事を対象にするのだ。それは知識、意味、解釈、社会的構築物、価値信条、記憶、内省や熱望などである。これらは全て、相互に影響しあう能力を携えており、ゆえに物質的現象あるいは出来事内部の生産的関係と考えられなければならない (Barad 2007: 152; Haraway 1997: 129)。このように、行為、相互行為、主観性と思考などの物質性へ焦点を当てることで、新しい物質主義はこれまでの精神と物質の二元論を、ダイナミックで生成的でありゾーム¹¹的な「現実」の生産によって切断していくのだ。バラッド (Barad 1996) が示したように、人間の観察者は、かれらが描写し説明しようと試みる行為内部に不可避免的に絡み取られる。客観性の失敗を嘆くよりも、新しい物質主義の展望は、思考、欲望、そして解釈がいかにして物質性の現在進行中の生産の一部になるかを明らかにすることにあるのだ (SNM: 26)。

第5に、「物質の力 (force) はローカルに作用する」という点である。社会学において、近代社会内部の権力は、長らく主要な研究対象となってきた (Giddens 1981: 49)。古い物質主義に区分されるマルクスの史的唯物論は関係的な権力論だが、上意下達の物質的社会的権力が階級を決定するという権力的視点を展開するものだった。これに対しポスト構造主義は、現代の権力を強制的でも上意下達的でなく、規律訓練的あるいは統制的なもので、日々の生活における人間の振る舞いに具体的にかつ詳細に介入するものとして提示した (Foucault 1990)。これは行為と出来事の水準で明らかになる現象であり、つまりフーコーが権力は「諸行為に働きかける」(Foucault 1982: 789) と述べるそれである。新しい物質主義的 sociology も、同様に上

意下達的な権力概念を批判し、そして出来事や諸行為のレベルにおいて行使される力¹² (ないしは情動) に焦点を当てる。新しい物質主義的一元論、つまり影響し影響されるという能力により組み立てられた関係の物質性の一元論において、力はどこか外部に存在したり、アセンブラージュの情動的フローを超えて存在したりするのではない。そうではなく、このフローそのものが力なのだ (Braidotti 2013: 188-9)。権力は一時的で変動的な現象であり、誰か/何かから誰か/何かに対するつかの間の行使 (exercise) である。もし、この権力が時空間を超えて複数の出来事で繰り返されるならば、より規則的なパターンを得ることになり、それが伝統的 sociology においてそれ自体で物事 (thing) としてみなされてきたものである (cf. 家父長制や新自由主義)。しかし、伝統的な見方は錯覚である。権力とは、それが次の出来事において反復される限りにおいて継続するものなのだ。権力に対する抵抗も同様に理解されるべきものとなる。権力に関しては社会構造と組織を扱う第4章において、また社会変革と社会的アクティヴィズムを扱う第10章で詳しく論じられる (SNM: 27)。

第6に、「社会学の物質性」そのものへの注目である。新しい物質主義的 sociology は、社会学自体を物質的で情動的なプロセスとして理解する。それゆえに、これは世界や社会的なものや自然的なものへの社会学自体の貢献について、反省的でなければならない。この視点は、社会調査実践を考察するのに適している。これまでの社会学や社会調査は (他の科学的調査同様) 人間中心主義的であり、調査者はそのプロセスの主要な駆動者であった。また調査者の合理性、論理、理論そして科学的方法論は、理解を促すためにデータのうえに徐々に秩序を与え

たが、しかしそれは世界とそれらの社会的構築の理解には不十分であった。新しい物質主義的社会学においては、調査研究それ自体をアセンブラージュと情動を媒介とした調査者と調査対象による出来事、あるいは社会調査に用いられる方法やテクノロジー、科学的理論といった人間と非人間の物質的総体からなるリサーチ・アセンブラージュとして再帰的にとらえる¹³。リサーチ・アセンブラージュは情動により形成され、またその他の物質性と同様に、権力と抵抗の関係性を生産し、研究の「客観性」の概念に資するいかなる資源も侵蝕していく (Barad 1996: 185)。これについては本書第9章で詳細に検討され、第10章では社会学がどのように社会政策、社会変革、権力と抵抗に関わるのかについての問題が検討される (SNM: 28)。

4-2 新しい物質主義的社会学の「新しさ」とは何か？

社会学の歴史においてはしかしながら、物質主義(唯物論)は目新しいものではない。では、新しい物質主義的社会学の「新しさ」とはいったい何か。

社会学的理論の伝統、とりわけ初期社会学の理論展開において、物質主義(ないしは唯物論)は、初期産業資本主義社会の発展を考察するための重要な視点だった。マルクスやデュルケム、そしてヴェーバーの著作においても物質的要素は不可欠なものだった。特にマルクスの史的唯物論は、社会学における物質的生産と消費の広範な経済的政治的文脈を考察する視点を生んだ。その後、現代の資本主義的生産をめぐる分析のために「構造的」あるいは「マクロレベル」の分析枠組みが形成された (SNM:5)。この学派的権力論も上意下達的なもので、支配的な社会階級による抑圧された労働者階級へ

の支配となって行使されるものと理解された (SNM: 5; Giddens 1981: 58; Nigam 1996: 9; van Krieken 1991)。

しかし、20世紀を通して「古い」物質主義としての唯物論の盛衰を我々は目撃してきた。物質主義的立場は、観念論者の系譜(人間の観念、信条、価値が社会を形成することを強調する系譜)に取って代わられる。つまり、ジンメル、ヴェーバー、ミード、解釈主義、現象学、相互行為論や社会構築主義から人間主義的社会学までの系譜である (Berger and Luckmann 1971: 208; Nash 2001: 78; Shalin 1990)。またミクロ社会学の登場が、相互行為、経験、知識と「言説」へと考察の幅を広げていく (Berger and Kellner 1964; Mulkey 1985; Scheff 1994)。さらに、フェミニズムと(日本語圏ではほとんど注目されないが)ポスト・コロニアル社会学が展開していくなかで、マルクス主義の狭い社会的階級論と権力論におけるジェンダーや人種その他の社会的境界線の不在が批判され、それらを含み込む新たな理論形成が試みられてきた (Barrett and McIntosh 1982; Crenshaw 1989; Hall 1996; Henriques et al. 1998; MacKinnon 1982)。フェミニスト、ポスト・コロニアリスト、クィア理論家によって社会科学に導入されたポスト構造主義あるいは「言語論的転回」は、社会的世界における権力の物質的作動を理解し、抵抗を理論化することを試み、史的唯物論の経済決定主義では効果的にとらえることのできない家父長制、ミソジニー、ホモフォビア、合理主義、科学と近代などを対象としてきた。ゆえに、人間の文化とテクスト性という視点から、階級、ジェンダー、社会組織と身体についての考察を深めていった (SNM: 6; Butler 1990; Foucault 1980; Henriques et al. 1998)。しかし、こうした「転回」は、テクスト性と文化的解釈

へ特権を与えるテキスト中心主義であるとして批判されてきた (Bonnell and Hunt 1999: 9; Rojek and Turner 2000: 639-40)。

新しい物質主義的 sociology は一面において、このテキスト中心主義への批判的応答としてある。新しい物質主義的 sociology の分析に共通しているのは、構造やシステムといった「マクロ」レベルの社会現象によるとらえ方を越えて考えること、そしてポスト構造主義の権力や文化、社会的行為への構築主義的とらえ方も捨てないということである (SNM: 6)。新しい物質主義は、ポスト構造主義や構築主義の「言語論的転回」をふまえて、社会的組織や社会的行為の構造決定論的な説明に甘んじてきた旧い物質主義を批判し、また他方で、権力と抵抗、言語と知識、身体と主観性の物質性を通じた複雑なつながりを認識する sociology なのである (SNM: 4; Fox 2016; Game 1991; Nash 2001; Parker 1992; Rose 1999)。

4-3 新しい物質主義的 sociology の想像力を社会的に適用する

4-1 で示した 6 つの理論的前提を社会的な研究や調査により適用可能な形で、具体的な対象を例示しながら説明するにはどうすればよいか。著者は、方法論上の違いはあるにせよ、現代の社会学者たちの中心的な関心対象である西洋産業化国の高齢化を事例に設定し、例示を試みる (SNM: 28)。第 2 章では物質主義的 sociology の核となる事柄がまだ説明されていないため¹⁴、ここではいくつかの「データ」(記述統計とインタビューの引用)を用いながら、これらを物質主義的アプローチから組み合わせることが試みられる。その際に用いられる概念が、関係性 (relation)、アセンブラージュ、情動、そしてミクロ政治学である。現代産業化国の特徴で

ある高齢化は、出生率の低下と寿命の改善に由来する。公式統計は、高齢化の傾向が継続し、より若い世代による高齢者の金銭的支援とケアへの需要が増大し、それら問題に挑戦しなければならないという物語を生産している。このような「マクロレベル」では、統計データは伝統的 sociology の高齢化理解への導入部分となろう。しかし本書の理論的前提 5 によると、力 (force) はローカルレベルで諸行為に作用し、社会的世界を作り歴史のフローを生産する。このように見るのならば、新しい物質主義の論者の開始点は、「高齢化」を構成する出来事において何が生じたのかへの注目である。「高齢化という出来事」のレベルに注目するために、オーストラリアとタイで行ったインタビューが引用される。ここでは前者のインタビューに焦点を当てよう。

オーストラリアの L さん (男性) は、彼のパートナーと高齢者用住居施設 (スプリングウッド) に住んでおり、そこは独立式の居住ユニットに共同空間がつながる形で建物が構成され、また医療・非医療従事者の支援スタッフが雇用されている。引用される L さんへのインタビュー内容をまとめると、政府レベルの賃金カットがスタッフの部屋への訪問回数を減少させ、結果として居住者が心臓発作になったとしてもナース・ステーションに誰もいないという危険な様子が語られる。それはインタビューにおいて痛々しい感情とともに吐露されるのだ。これをふまえて、理論的前提 1 (物質/事態への注目) と理論的前提 2 (物質/事態が何かではなく、何をするのかへの注目) に取り組むために、まずは分析を一貫して物質的なものとそれらの関係性に焦点化させなければならない (SNM: 30)。著者はこの事例のデータから、「ローカル」な関係性 (インタビュー) と、い

くつかの文脈（公式統計）を発見した。その結果、「高齢化アセンブラージ」は「相互内行為」（Barad 1996: 179）する物質的關係性の群れであり、ゆえに以下のように表現できる（順不同）。

Lさん—Lさんのパートナー—「スプリングウッド」高齢者住居—コンクリートとガラス—健康—医療施設—ケア・アシスタント—ケア・プラン—維持管理—他の居住者—記憶—恐怖／不安—Aged Rights Advocacy（高齢者支援政府機関）—政府—資金—国民保険政策—高齢化人口—時間（SNM: 30）

さらなる関係性やインタビューをこのアセンブラージに追加することができる¹⁵。理論的前提3（人間のエージェンシーは特権化されない）は、人間中心主義的な注目から、情動性へと注目を移行することを可能にする。理論的前提4（思考、記憶、欲望そして感情は物質的諸効果をもつ）の視座からは、これらアセンブラージが何を行うかを知るためにインタビューと参与観察が用いられる。このアセンブラージでは、スタッフが居住者に物質的かつ心理的にどのように影響するのか、建造環境が居住者の気分や振る舞いへどう影響するのか、政府の政策がケアに与える影響はどのようなものか、また翻ってどのようにケアの質が居住者の不安あるいは恐怖を生産するのか、どのように記憶が居住者の日々の選択や決定に影響するのか、複数の義務によるスタッフの時間的負担はどうか、ケア・プランそのものが実際に供給される諸医療措置にどのように影響を与えるか、高齢者支援者と管理業務の間の対話はどのように成されるのかなどが構成要素として挙げられよう。こ

のように、イベントをマクロとミクロ、自然と文化、人間と非人間の二元論を超えて、アセンブラージとして理解することが可能なであり、著者はこの研究手法を「ミクロ政治」を読み解く手法として展開していくと述べる。

4-4 社会的生産のミクロ政治

第2章の最後を著者は、アセンブラージに関係する諸概念について詳細に述べて締めくくる（SNM: 32-4）。アセンブラージ内部では、ドゥルーズ＝ガタリによりもたらされた2つの分析的概念が作動している。

1つめは「領土化(territorialization)」（Deleuze and Guatarri 1988: 88-9）という概念である。すでに、アセンブラージ内部の情動のエコノミーが諸身体とその他の関係性において特定の能力（capacities）を生産していることを見てきた。これは「エコロジカル」な特定化（specification）過程であり、フランス語の農業概念である terroir（農産環境）、つまりいかにして既存の物質的環境がワインやミツバチの巣箱の能力を打ち立て、ワインや蜂蜜という特定の物質を生産するのかという環境の特徴を指示する概念と似ている。同様に、アセンブラージ内の関係性からもたらされた諸情動は、身体あるいはその他の関係性の能力（capacities）を特定化あるいは「ローカル化」する。これら領土化／特定化は絶対的ではない。その理由は、他の情動が脱領土化／一般化し、身体を再領土化／再特定化し、身体ができることの可能性と限界を再形成するからだ。先の事例は、Lさんとパートナーの高齢化に関する自然および社会文化的情動の領土化／特定化であった。他方で、ケア・アシスタントは雇用、時間、ケア・プランの遵守必要性により領土化されたのであった（SNM: 32）。

2つめは「集合的 (aggregative)」および「単一的 (singular)」情動という概念である (Fox and Alldred 2014) ¹⁶。集合的情動は複数の身体に同様に作用し、これら身体を組織化あるいはカテゴリー化することで、収斂されたアイデンティティあるいは能力を生産する。Lさんとパートナーはスプリングウッド・アセンブラージに集合化 (aggregating) され、そこに依存する居住者としてカテゴリー化され、かれらの地位、能力、そして他者への期待が作られた。集合化は人間文化においては広く行き渡っており、ジェンダー、人種、階級など第4章で参照される社会階層化や、「非行」、「犯罪」、「異性愛」などの社会的諸カテゴリーを生産する。また、偏見や思い込みは、人間を特定の物質的ないしは振る舞いをもつ性格へと集合化するだろうし、他方でフーコーによる人間の操行についての言説 (Foucault 1976, 1979, 1981, 1990) のように、規律訓練あるいは統治性を通して身体を集合化させるだろう (SNM: 32)。

対照的に、単一的情動は、単一の結果や能力を、単一の身体やその他の関係において生産し、集合化する結果を生まない。Lさんの事例においては、彼がケア・アシスタントに手伝いをお願いしようと何度も呼び出そうとする試みや、あるいは建築が彼の気分を与える影響などが、単一的情動と言える。出来事は大抵の場合、においが記憶をよみがえらせる感情となりそれが行為や決定を生産するというように、多くの単一的情動により構成される。このような単一的情動は、脱領土化のマイクロ政治的原動力になるかもしれない、集合化する権力に対抗し、新たに行為し、感じ、欲望する能力を与えるかもしれない。このひとつの脱領土化は、ドゥルーズ＝ガタリにより「逃走線 (line of flight)」(Deleuze and Guattari 1988: 277) と呼ばれる。このよ

うなものとして、物質主義的立場からの抵抗が定義されるのである (SNM: 33)。これら特定化／一般化と集合化／脱集合化は、アセンブラージのマイクロ政治を探究する著者の分析道具となる。スプリングウッドの依存文化は、高齢化の文化理解や高齢者ケアの建築的かつ社会相互行為的制度化などにより媒介され、また緊縮経済とスタッフ不足により悪化させられている。同時に、そこには単一的情動と逃走線の可能性が残存しており (Fox 2005)、抵抗は常に可能なのである。この視点は、人間の加齢をめぐる物質性への批判的展望のための基盤になり、いかに自然的なものと文化的なものが共に社会的世界の形成に寄与しているかを明らかにするだろう (SNM: 33)。

本節では、新しい物質主義的 sociology の理論的前提について紹介し、それを実際に事例に用いる著者の方法を提示した。具体的には、物質的なアセンブラージの特定とそのアセンブラージ内における情動のフローを分析する方法論であり、このマイクロ政治的分析により、具体的な対象のダイナミックな生成を明らかにすることができるのである。それでは、実際に社会学的対象の分析にこの方法を本格的に導入するとどうなるだろうか。以下の節でそれを検討する。

5 社会学的対象への具体的な適用

ここまで、新しい物質主義とそれに依拠して構想される新しい物質主義的 sociology の理論的系譜と前提、社会学的研究への適用の仕方、およびその「新しさ」を見てきた。理論および入門編はここまでにして、以下で実際に新しい物質主義がどのような対象に適用され、新たな知見を得ることができるのかを、本書第3章以降を対象にいくつか見てみよう。全ての章を取り

上げるには紙幅が限られているため、以下では主に第3章（環境）、第4章（社会）、第5章（創造力）、第7章（感情）を取り上げたい。これらの章が扱う問題は、自然と文化、構造とエージェンシー、生物学的身体と文化的身体といった二元論のどちらか一方の見方が正当であるものとして論じられる傾向にあった。新しい物質主義的社会学はこの二元論を超えて、新たな知見を表明することになろう。また各章で取り上げられるトピックをふまえながら、評者による事例もいくつか挙げてみよう。

5-1 環境社会学への適用（第3章）

まずは、第3章「環境：人間、ポスト人間、そして環境社会学」を見てみよう。環境社会学は、連子符社会学のなかでも相対的に人間中心主義ではない領域であり、人間社会のみならず周辺の自然環境などとの関係性に長らく注目してきた分野である。著者は、環境と人間社会をめぐる新しい物質主義的社会学を通して、文化と自然、人間と非人間、エージェンシーと構造といった二元論を超えた一元論的存在論に基づいた対象の理解を促そうと試みている。本書では、環境と人間社会の双方を包含した射程を研究するための、いくつかの基本的な問いが提示される。すなわち、

- どのような関係性が組み合わされているか？
- これら関係性を組み合わせ、そこに出来事を生産する関係性内部の情動（と情動的エコノミー）は何か？
- この情動的エコノミーにより、様々な関係においていかなる能力が生産されているか？ 人間と非人間の関係性は何をするのか？
- 出来事アセンブラージのミクロ政治は何か？

か？ アセンブラージ内のどの関係性が強力なのかについて、出来事は何を示しているか？（SNM: 45）

環境の破壊が人間に健康被害をもたらすことを、近現代社会の人類は十分に目撃してきた。例えば、環境被害の原因を特定することが困難である理由は、人間が作り出した化学物質そのものの物質性が流動的で、かつ自然環境への流出経路が複雑であることに起因する。これは、社会そのものが環境を含めた人間-非人間の複雑な編成として存在するからである。著者は、これまでの環境社会的見地における人間中心主義的理解や、自然を扱っていたとしても社会と自然の分離を自明視していた先行研究を批判するなかで、非人間中心主義的かつ社会-自然的な環境の研究可能性について探究する（SNM: 39-40）。著者は、環境と健康の具体的関係性について物質主義的な分析を提示する。健康とは個人の身体や文化的な認識のみによって決定されるものではなく、社会-自然の諸アセンブラージ内部（身体、感染体、動物、植物、疾病、化石燃料、大気状態、気候、海岸線、経済的政治的システム、消費者、原動機付き車両、政府も含めて、その他すべての推定される健康/環境の相互行為）で生起するものである。これらに加えて、人間の精神や文化や社会からもたらされる表現的（expressive）関係性として、信条や欲望、観念や感情、政治運動や制度機関、イデオロギーや言説など、相互に物質的に影響しうるものを追加しなければならない（SNM: 40）。

新しい物質主義的社会学は、人間と非人間、文化や自然などの存在を区別せず扱い、これら人間と非人間の諸アセンブラージを特定のアセンブラージとして同定する作業を行う。例え

ば、「雇用」フローは雇用者、労働者、労働現場、住宅、経済などをつなぎ、また「輸送」フローは道路、旅のモード、燃料、汚染、住居、学校、労働現場などをつなぐ。さらに「気候」フローは、化石燃料、産業と輸送、大気、太陽などを包含する。これら情動的フローの能力が、アセンブラージにより編成された諸出来事を生産し、そのアセンブラージには経済的生産、教育、交通渋滞、劣悪な大気環境、気候変動、そして有害な健康的影響が含まれる (SNM: 46)。それらの可変的な連続性を対象にすることで、問題を作った化学産業、社会問題が生成する政治的フローと経済的フロー、被害を具体的に受ける人々と化学物質、地域社会を支える社会—自然インフラ、自然環境の具体的な関係性の推移、そして諸関係におけるマイクロ権力メカニズムなどを、人間—非人間を超えた形で追跡することが可能になる。また、物質性へ注目することは、工場のメタリックな概観、電信柱、信号機などの建造環境から、工場労働者や農業従事者、また市役所職員の服装、松やブナなどの植生、産業による経済的フローの地域行政や地域住民への循環、産業と行政の相互的統治実践、地域計画の政治性やそれに対する反対運動、地域住民の記憶や希望などの感情、国際気候変動政策による地域的影響に至るまで、研究の対象が広がっていくことを示している。

5-2 社会をめぐる批判と社会的想像力 (第4章)

第三章では、自然環境が主に扱われてきたが、社会的および文化的「環境」についてはどうだろうか。第4章「社会：システム、構造、階層化を超えて」は、社会を対象として論じられる。本書によると、これまでの社会学者は、社会的行為の社会的「文脈」における人々の行為可能

性と、それを限界づけるものとしての構造化の局面を考察してきた (SNM: 54; Durkheim 1976[1915]; Parsons 1951; Bourdieu 1990)。他方で本書は、ラトゥールにならって「アソシエーションの社会学」(Latour 2005: 9)を、物質主義的な社会組織分析への展望としてとらえる。この視座は構造、システム、メカニズムなどを拒否し、権力と抵抗の双方を、「出来事」を組み立てる情動のマイクロ政治において分析する (SNM: 55)。本書の立場から見れば、社会階級の分析にしても、現代においてはマルクス (Marx 1959) が描いたような、階級の正確な記述が世界を描き出すという視座は、徐々に現実を反映しないようになったと映る。また階級のみならず、新たに概念化された人種やジェンダーなどの概念は、本書では相互に基本的な類似性をもつ個人からなる集合ではなく、異なる人々の集合体 (aggregation) とみなされる。これらのマクロ概念は、研究の開始局面から動員される変数ではなく、説明されるべき変数なのである (SNM: 56)。アセンブラージは、関係性に対していかなる力も行使しない。この力は単に影響し影響された関係性の結果なのである (SNM: 57)。このアソシエーションの社会学モデルは、「社会的力」、「構造」、「システム」などの概念を活動や出来事の説明として動員しない、二元論的社会学からのラディカルな脱退なのだ (SNM: 57)。ゆえに、著者の主張では、例えば「社会的格差」を説明する際に、「階級」や「新自由主義」などの概念を初めからは用いない形で説明を試みなければならない (SNM: 58)。

例えば評者による一例として、社会運動と運動組織の分析を考えてみよう。先進諸国における労働運動は、労働組合加入率の低下に

伴い、かつての勢いを現在失っている。しかしこれは、環境運動やフェミニズム運動などに代表される「新しい社会運動」に取って代わられた「旧い社会運動」なのだろうか？ マクロ概念を用いて対象を規定するのならば、労働運動の構成員は労働組合員属性をもつことには変わらないし、統計的には組合員数が減少傾向にあることは明らかである。しかし、実際にフィールドワークをしてみると、「旧い」とみなされた労働運動内部には、会社が生産する産業廃棄物処理問題を扱いながら環境運動を行おうとする組合員や、女性労働者の待遇改善を求めるフェミニスト労働組合員も存在する。つまり、構造的属性のみではとらえきれない新たな属性が発見されるのである。ゆえに、「環境型－フェミニズム型労働者の労働組合運動」という新たな具体的カテゴリー形成が可能になる。また、組織をめぐる持続性を見てみよう。労働運動は、それまでスト破り防止のために内的に強固なマスキュリンな組織構造を形成していたが、組合員減少傾向からそうも言うておられず、また増加する女性社員のオーガナイズのために、組合自体が変化せざるを得なかったことも注目される。女性労働者の増加によって、組合内部の男性主義的文化も変化し、それまで飲み会が主流で、しばしば終了時間が決まっていなかった組合会議が、3時間の会議後に食事会で解散という形に変化していった。これにより、組合活動とプライベート領域の再領土化が行われた。お金の支払い方も、先輩が後輩におごるという慣習から、性別を問わずに平等に支払われるという形に変化した。このように、マクロ概念からはとらえられなかった変化を、本書の物質的文脈化への注目によりいま・ここで生成する組織内関係という現実味をもった変化として描き出すことができる。つまり、外からのマク

ロ概念の適用では見えなかった個別の潜在力 (force=puissance) (組合員構成の変化による物質的・文化的変化に影響を受けた、組合会議における様々な意見と駆け引き) が、具現化され規則的に循環する権力関係 (power=pouvoir) (妥協物としての組合内の組織的編成と組合決定) へと変革していく過程、そしてそれらが具体的な物質性をもって組織されていくさまを、ここでとらえることが可能になるのである。

5-3 創造性 (第5章)

自然 (環境) と社会構造の分化に対する新しい物質主義的 sociology の視点の適用が説明されたあと、第2部 (第5章～第8章) では、創造性 (第5章)、セクシュアリティ (第6章)、感情 (第7章)、健康 (第8章) と、著者の専門領域である医療・健康・セクシュアリティに関する領域での適用が試みられる。以下、第5章と第7章を対象に考察する。

第5章では、本書のなかで探究される物質的なものとは「生産的 (productive)」なものであると宣言される (SNM: 77)。前述の人文地理学者のスリフトの言葉を借りれば、「生産とは、生き物、社会、歴史などが、相互行為を通して能力を増大させることで、常に生成する世界へと広がる手段」(Thrift 2004: 61) を意味する。アセンブラージは能力を特定化 (領土化) し、また一般化 (脱領土化) する (SNM: 77)。生産は物質的なものに帰結するかもしれない (食物、ソフトウェア、降雨や雷雨など) が、それ以外にも多くの「社会的なもの」、つまり「相互行為、感情、言葉、思考、アイデア、新たなアソシエーションと共同性などの社会と文化を生成するもの」(SNM: 77) にも帰結する。生産の多くはくり返して習慣的なもの (労働、子供の世話、家事など) かもしれないが、生産の

なかには新たな基盤を生み、創造的なものを作り出し、身体と共同性のための新たな可能性を生むものも存在する。この「創造的な生産」が第5章で中心に扱われる。

創造性やイノベーションに関する研究はこれまで多くなされており、本章でも多く参照されているのでここでは深く立ち入らないが、第5章ではアーティストと創作活動の分析における新しい物質主義的立場が打ち出される。社会学者はこれまで、芸術社会学は理論的に貧困であり、アーティストのエージェンシー（「社会化の度合いが低い（undersocialized）」という創造性の説明）か、社会構造やコンテキスト（「過度に社会化する」もうひとつの説明）のどちらかの説明に偏っていると批判してきた。これを乗り越える形で、ANTを導入してモノから人間への影響力を考察したアート社会学が出てくるが（Gell 1998）、これらの議論もせいぜいアーティストと作品しか扱っておらず、新しい物質主義の論者には物足りない。

ゆえに著者は、アセンブラージ概念などを動員しながら以下の点を強調する（SNM: 84-5）。第1に、様々な人間身体（アーティスト、モデルなど）や作品、そして他の身体、モノ、アイデア、社会的制度と関係する以外には本質的な存在や属性を持たずに、アート制作と消費に参与する物質的なモノを研究対象とすることで。これらはアセンブラージのなかでのみアイデンティティを獲得する。第2に、いかなる要素も、単体の主要なエージェンシーを持たないことである。その代わりに情動（影響しまた影響される能力）の概念が適用される。情動は物質的、心理的、感情的、あるいは社会的たり得る。これは「創造性アセンブラージ」と呼ばれる。具体的には、いかにアーティストと絵の具がキャンバスをしるし付けるのか、どのよ

うにモデルのイメージが製図や絵を書く際にアーティストに影響を与えるのか、どのようにアーティストはスタイルや視点を展開するのか、あるいはどのように聴衆は音楽や映画などの芸術的作品に応答するのかなどである。非人間的物質性も情動的である。例えばキャンバス上のしるしが、アーティストが次に描くしるしにどのように影響を与えるのか。あるいは、ある特定の作品が聴衆にどのように影響を与えるのかなどの情動性である（SNM: 85）。

第3に、単一的（singular）情動と集合的（aggregative）情動を区別することである。前者の例を挙げると、単一の記号や独特な音楽の一節などであり、後者の例はアーティストがもつ作品の特徴に合致した絵の具のパレットである。前者は単一の効果しか生まないが、後者はより安定した形態を生産し、群れを統一化ないしは組織化する（SNM: 85）。単一的情動¹⁷には、集合的情動としてのアセンブラージを作る潜勢力がある。物質主義的 sociology の視座に立つと、もはや創造性は身体の主体行為的な属性としてはとらえられず、組み立てられた身体、モノ、アイデアの間の情動的フローとみなされるのだ（SNM: 86）。

たとえば著者によると、ルネッサンス画家のボッティチェッリの「ヴィーナスの誕生」と、ピカソのキュビズムに影響を受けた裸婦のアセンブラージを考えると、以下のようになる。

キャンバス——絵の具——モデル——女性に関する信条——美の見解——アーティストの性的あるいはその他の反応——美術的伝統と流行（SNM: 87）

これらは、美術的生産を通じたその他の多くの人間や社会的関係によりさらに増幅させられる

こともある。つまるところ、創造性とは、アーティスト個人の天才という人間的属性や人間的能力ではなく、創造的生産と創造性—受信的 (creativity-reception) 出来事の双方を組み立て展開する情動のフロー（あるいは情動のエコノミー）以上でも以下でもないのである。

5-4 感情 (第7章)

もうひとつの対象として、第7章の「感情」を取り上げてみよう。感情は通常個人的で身体の「内的」なもののみなされているが、感情の分野は「感覚する思考」とでも呼べるようなものを生産するための、精神（文化）と身体（生物学）を独創的につなぎうる社会学的想像力を鍛えてきた (SNM: 114)。著者が感情を取り上げる理由は、第1に社会理論において感情が文化と生物学に二分されてきたからであることと、第2に感情は最近まで社会的生産と社会的変革に果たす役割において過小評価されており、ようやく社会理論の「情動論的転回」と呼べる潮流が生まれているからである (Blackman 2012; Clough 2008; Jasper 2011)。これらをふまえつつ、新しい物質主義的社会学では、感情が文化と生物学の間で感覚する思考を構成することに注目するのではなく、感情を人間身体が物質的および社会的環境と接合する情動性のひとつの連続性として位置付けている (SNM: 115)。

感情に関する研究は多数あり、ここでは全て紹介できないので本書を参照されたいが、大枠では以下のように分岐していた。心理学と神経学では、感情は「何なのか」に中心的な関心があり、他方社会学は、感情が「いかにして」社会的環境や精神や身体と相互行為を行ってきたのかに注目してきた。また社会学と社会政策学では、合理主義的社会の理解の反動として感情

への関心が高まり、フライトアテンダントや看護師の「感情労働」などの概念が探究されてきた。伝統的な社会学では、感情は社会的あるいは物理的環境への反応としてみなされ、それらは個人や集団にとって特定の意味ないしは価値をもっているものと考えられた (SNM: 116)。感情の社会学は、心理学的かつ個人主義的な感情の見方を超えて、感情の生理学および社会学の側面の双方を理解する視座を見つけ出すことを目的としたのである (Williams and Bendelow 1996: 34)。

その解決的展望の1つめが、社会組織における感情の発露および管理などを経験的に探究し、生理学的な感情的反応の問題を回避する「構築主義」と呼ばれる立場である。なぜなら、感情は文化的で社会的な多様性を見せるからであり、ゆえに社会学的視座は、感情と道徳秩序、感情に関する諸言説など、感情という語彙が利用されるその在り方を問うべきだとされた (Freund 1990: 453)。構築主義者にとって感情は、個人の身体的経験が文化的文脈や社会化の力と結びついた際に発露する表現である。ゆえに、社会的性差に基づいた客室乗務員の感情労働などが研究対象として注目された。2つめの展望は、相互行為論、現象学、実存主義や、身体化への注目からなる (Freund 1990; Williams and Bendelow 1996)。この潮流では、なぜ、そして、いかにして特定の環境が感情的反応を導いたのかが考察される。これら理論家は、生物学、心理学、精神分析、現象学などの個人主義的アプローチを大なり小なり用いてきた。まとめると、構築主義的感情理解は一方で生物学的側面を軽視し、他方で相互行為論は対照的に、生物学的あるいは心理学的還元主義に陥る傾向にある。しかし両者は、同じ社会学的展望をその根幹にもつ。それはつまり、感情概

念を個人的人間身体と個人的主体に結びつけて考えることにある。ゆえに感情は、身体的経験とされてきたのである (SNM: 117-8)。

新しい物質主義的社会学は、しかし、上記の身体的現象としての感情と、社会的環境と人間生物学の間を接合する「独自性」として想定される感情という概念の双方に疑問を突きつけ、人間中心主義的理解から撤退することを試みる。これまでの事例でもみたように、著者は感情をより大きな情動的フローの一部分として考える。つまり、一方で感情が情動の生産物だとすると (cf. 試験に失敗した後に恥を感じる)、感情は他方で自らの正しさにおいて身体能力を生産する情動にもなるはずである (cf. 家族や友達への「愛」などがかれらを危険から救う英雄的行為のための能力を生産する) (SNM: 119)。この二重の感情の特徴は、出来事アセンブラージと分かちがたく結びつき、また感情がいかにして「生成するのか」を理解する道具を提供することになる。ゆえに以下のことが言える。「感情や気持ち (feeling) は情動であり得る (し、これは身体あるいは精神の状態を生産する) が、単に情動全体の少数にとどまる」 (SNM: 120) と。

それではロマンティックな「愛のアセンブラージ」と著者が呼ぶものを見ていこう。第1に、愛のアセンブラージ内部には、行為、欲望あるいは感情の異なる能力が生産されている。いくつかは物質的である (cf. 愛する者とのキスやハグは感覚を生産し、これがさらなる性的興奮などの物理的効果を生むこともあるし、それらは認知的あるいは感情的能力と同時に生産されうる)。情動は欲望を特定化／領土化することができ、外出してロマンティックな食事会に行くことや、特定の主体的位置 (cf. 彼氏、パートナー、カップルなど) や、関係の終焉などの

決定さえも生産する。性的振る舞いの規範などのように社会的で文化的な情動も、このアセンブラージの身体に影響する。また、身体に「感覚する」という能力を生産する情動もあり、これら感情的な反応は、愛、悲しみ、妬み、性的欲望などと一般的には呼ばれている (SNM: 121)。第2に、愛のアセンブラージは「循環」する。これら能力は、単一のあるいは複数の情動に帰結し、感情もこれらアセンブラージ内部の情動として、愛する者たちの能力あるいは欲望を増大させたり減少させたりすることが可能である。ゆえに、愛、怒り、あるいは恐怖などは、行為のための強力な動機となり得るし、1回のキスが映画に行ったり、セックスをしたり、結婚したりする決定を生産することがあり得る。第3に、愛のアセンブラージは、身体、モノ、社会形態、抽象的な概念などを包含し、自然および社会的世界を横断し、またミクローマクロレベル、公私、制度—自律的領域を横断する。例えば、愛のアセンブラージは、寝室とバレンタイン・デーのカードを生産する会社の役員室をつなぐことができる。あるいは、ストーキング、セクシュアル・ハラスメント、そしてより悪質な行為が、愛の文化的限界として立法や司法により制限される局面と、アルコールや美容院、そしてセックス補助具の生産会社や小売業者をつなぐこともできよう。このような愛のアセンブラージのなかでは、愛する者たちの感情は、単により広範に彼／彼女の身体と生を通して循環する諸情動の一部分に過ぎないのである。感情は身体が出来事に対する反応ではなく、影響する能力としての情動のひとつなのである (SNM: 122)。

本節では、環境、社会、創造性、感情といった、対象の理解が二元論的に現れる領域において、新しい物質主義的社会学の方法論が適用さ

れうることを見てきた。本節の具体的事例で明らかになったように、これまでの社会学的想像力では超えることが難しかった研究視点を、アセンブラージ内部の物質性の力や、人間と自然、精神と物質といった領域を包含するようなダイナミックな分析を通して超えることが可能であることがわかった。また、社会を集合体 (aggregation) としてとらえることで、人間以外のアクターも含めた動的編成として分析可能であることが分かった。次節では、社会学そのものの実践と、アクティヴィズムとしての社会学という側面から著者の方法論を検討していこう。

6 社会学実践の新しい物質主義的考察

6-1 リサーチ・アセンブラージ論の要諦

以下では、まずリサーチ・アセンブラージ論について、議論の要諦を確認する。次に、物質主義的な社会学による「出来事」への関与について権力論を中心にみていく。最後に、これらの議論をふまえながら、論点とさらなる研究課題を整理する。

著者によれば、社会を研究するこれまでの営みは、他の科学研究と同じく人間中心主義的であり、研究者をその主たる担い手とし、研究者の思考や論理、理論、そして科学的方法により「データ」へと秩序が与えられることにより、不完全ではあっても世界の理解を得られるとされてきた。しかし、本書が提起する物質主義的な視座によれば、調査・研究とは、研究される出来事、研究者・調査者を含めた、研究の過程で見出される身体と事物と抽象からなるアセンブラージである (SNM: 152-3)。すなわち、リサーチ・アセンブラージとは、研究される「出来事」と、調査票やインタビュー・スケ

ジュールやその他の装置といった研究の道具、記録や分析のテクノロジー、コンピューターソフトウェアやハードウェア、理論的枠組みと仮説、研究の文献や先行研究の知見、方法と技法によって生み出される「データ」、そして研究者といった、一連の過程を構成する幾多の事物によって構成される。このリストには、文脈的な諸関係が追加される (例えば、調査・研究が行われる物理的な空間、調査・研究体制、科学的研究を取り巻く枠組み、哲学、文化と伝統、倫理的原則と倫理委員会、研究評価の実践、図書館や雑誌、編集者や査読者や読者といったアカデミックな研究成果をなす事物など) (SNM: 155)。

調査・研究に対してアセンブラージ概念を適用することの要諦はどこにあるのか。本章の議論を評者なりにまとめると、次の3点になる。

第1に、調査・研究過程における主体としてのヒトの特権性が否定・解除される。調査者・研究者というヒトは、研究対象となる出来事とそれに付随する道具、テクノロジー、科学研究の理論などを含む多くの諸関係からなり、多様な物質的潜勢力を生み出すアセンブラージを構成する「要素」であって、その過程に君臨する主体ではないとされる。と同時に、研究の焦点も、人間という行為者からアセンブラージヘシフトする。したがって、研究の関心は、個々の身体や物事や社会的制度が何であるかではなく、アセンブラージ内部の情動のフローによって生み出される、行為や相互行為、感情や欲望の潜勢力にある (SNM: 154)。

第2に、アセンブラージの概念を使用することによって、調査・研究の各過程における方法や技法を「機械」として細分化し、それぞれの働きについて精査することが可能となる。すなわち、研究プロセスのすべての段階、例えば

データ収集や分析、標本抽出や妥当性の確保などを、特定の成果を生み出すために作動するよう組み立てられた「機械」として扱うことができる（例えば「データ収集機械」）。研究の方法論とは、その過程を構成する諸要素の間での作用のフローとそれが生み出す能力とを生み出すべく、これらの「機械」が特定のかたちで編成されたものであって、出来事と道具と研究者がどのように相互行為をするかは、これらの「機械」がどのように設計されたかによる（SNM: 155-6）。

第3に、調査・研究過程における権力作動について、そのミクロ政治学的な分析が可能となる。これは、しばしば社会研究の「ブラックボックス」とされてきたものを開示し、研究プロセスにおけるミクロ政治学を明らかにすることを可能にする。それによって、どのように研究を設計し、方法を機能させ、対象となる出来事に対しどのような作用をもたらすのかについての知見が提供される。著者によれば、社会調査や社会学研究とは、こうしたリサーチ・アセンブラージと出来事との相互内行為（intra-actions）によってハイブリッドなアセンブラージが生成されるプロセスである（SNM: 156-8）。

6-2 新しい物質主義の権力論と社会的関与

社会的なものの学知たらんとする社会学において、社会の（無）秩序はいかにもたらされるのか、社会はいかに持続／変動するのか、という問いは、中心的な関心事である。そして、社会の秩序形成と変動に社会学はいかに関与するのか（すべきなのか）という問いもまた、社会学の歴史にとって課題であり続けてきた。これらの問いについて、著者によれば、多くの社会学者たちは「権力(power)」と「抵抗(resistance)」

という相互に関連した2つの概念をめぐって、大きく2つに大別される議論を展開してきた。ひとつは、強制的で「上から」の現象として権力をとらえようとする議論であり、ヴェーバーやマルクスらの権力論が代表的なものである。もうひとつは、フーコーによって触発された、人々のみずからの行動や思考や欲望を社会的な規範や倫理へと規律化していく日常の実践において作動する、広く拡散された権力というとらえ方である（SNM: 178-9）。

これらの権力論に対し、著者は物質主義的な存在論にもとづく権力概念を提起する（SNM: 179）。第2章と第4章でも述べられていたように、新しい物質主義においては、観察された出来事の背後にあって、その秩序や規則性を生み出す「別のレベル」の構造やシステムやメカニズムの存在を認めない。時々刻々、社会的世界をつくりだしているのは我々の周りに起こる出来事群であり、その只中において権力は作動する。著者の存在論にとって権力とは、社会的世界を構成する相互行為のなかへ浸透する不定形な何ものかではなく、日々の出来事群が生起するうえで不可欠（integral）なものである。したがって、権力の働き（とそれへの抵抗）は、アセンブラージの関係的な存在論内部における行為や相互行為や出来事や作用に着目することによって、ローカルなレベルにおいて追究されるものであり、これまで社会学者たちが権力と呼んできたものは、集合した諸関係の間のミクロ政治学的な相互行為に他ならない（SNM: 179）。

著者によれば、「抵抗」もまた同様である。抵抗とは、権力に対する受動的な反応ではなく、アセンブラージへの新たな作用をもたらすことによって、既存の力（すなわち「権力」）を減少させ、行為と主体性が他なるものになる

ような逃走線の新たな可能性を解放することである。権力と同様に、抵抗とは過程であり、一時的で流動的な物質的作用の一部である。したがって、権力と抵抗とは、同じ現象がもつ2つの側面なのであって、つねに増減し、位置を変え、反転し合う関係にある。社会学が権力と抵抗と呼び習わしてきたものは、特定のアセンブラージにおける諸関係の間で起こる作用の生成変化の2側面であって、あらゆる出来事において権力と抵抗を見出すことができるのである(SNM: 182-3)。

こうした権力論に基づいて、社会秩序と変動に社会学はいかに関与しうるのであるのか。著者は、「政策」と「アクティヴィズム」という2つを挙げて説明する。政策は、「上からの」の権力発動でも社会的相互行為を決定する1回限りの出来事でもなく、出来事や市民社会に広くいきわたり、無数の出来事のなかで絶えず参照され、改訂されていく、つねに完結しないダイナミックなプロセスとしてとらえられる。新しい物質主義的社会学では、政策の編成よりも政策の遂行へと焦点をあてることによって、政治のミクロ政治学(micropolitics of politics)を明らかにする。このことによって、社会学は、政策の実践的な影響や、また政策の洗練や改訂、時にはその解消に関する知見を提供しうるのである(SNM: 185-8)。

アクティヴィズムについてはどうか。社会運動をめぐる社会学においては、しばしば社会的なアイデンティティをめぐる本質主義的な視点と構築主義的な視点とが対立し、それはアクティヴィストたちの実践と社会学者との間に距離を生じさせてきた。物質主義的な社会学は、諸身体やモノ、社会的制度や記憶の諸関係からなるアセンブラージにおける作用フローの理解を発展させることによって、長く続いてきた二

元論を横断する空間を提供し、行為の新たな可能性を生み出す作用を明らかにする。それが社会学のなしうる関与であると著者は主張する(SNM: 188-91)。

6-3 権力論と社会調査論の物質主義的な革新とその課題

まず、第10章で展開された権力論について検討しよう。とりわけ、観察される出来事の説明として「別のレベル」の構造やシステムやメカニズムの働きを認めないとする本書の視座は、それを社会学実践に実装しようとするとき、慎重な検討が必要となるであろう。すなわち、特定のアセンブラージ内部の行為や出来事や作用をローカルなレベルにおいて追究していくことは、結果として目前の現実を肯定・追認するにとどまるのではないかという疑念・批判に対して、新しい物質主義的社会学はどう答えるかがひとつのポイントとなる。

上述したように、新しい物質主義的社会学において「政策」は、身体やモノ、社会的制度の諸関係からなる特定のアセンブラージにおける情動のフローであって、完結することのないプロセスとしてとらえられる。ある政策とそれに基づくリアリティが、人、様々な諸装置といったモノ、言説などからなる布置連関によってかたちづくられ実現していく、そのプロセスを具体的な細部から徹底的に記述していくことになる。このプロセスを記述していくことは、中川の言葉を借りると、「どのような細部に積み重なりによってこの強固に見える現実が作られているかを記述することは、同時にどの細部を動かせば変化が起こるのかを明らかにすること」だからである(中川 2011: 83)。

だが、構造やメカニズムによるアプローチそれ自体をただちに放棄するかどうかは、さらな

る議論の余地がある。社会学という学知は、観察・経験された事柄と「遠い」事柄とをその「想像力」によって架橋し、説明・理解していくことを使命としてきたからである。したがって、新しい物質主義的の社会学を実践しようとするときには、この意味での「社会的想像力」との差と緊張関係とを、研究者がどのように引き受けるのが大きな課題となるだろう。しかしながら、経験的な研究を志向する立場からすれば、どのような理論であれ、それを使用することの正当性は、その原理的忠実性よりも、その理論を使用することによる説明力の高さと認識の深さにあろう。また、本書が批判しようとしているものは、単純かつ一方的な構造やシステムによる決定論的説明であって、著者も構造やメカニズムによる説明自体を完全に放棄しているわけでもない。重要なことは、無媒介な構造やシステムによる説明を避けることであって、出来事と構造との間をつなぐ回路を丁寧に跡づけていくことである。

さらに言えば、第10章の議論においても、本書の権力論に基づく「政策」や「アクティビズム」分析が新たな地平を説得的に示しているとは言えず、いまだ萌芽的な段階にあると言えるだろう。マルクスやヴェーバーの構造的な権力論から、フーコーの微視的権力論を通過したうえで、新たな権力論を構築し、分析枠組みや概念を生産しながら、経験的研究との往復によって錬磨させていくこと。むしろ本書の議論は、そこにこそ現代社会学の課題があることを示していると言えるのではないだろうか。

次に、リサーチ・アセンブラージ論について、この概念を積極的に用いることの意義について検討する。第1の要諦である調査や研究プロセスにおけるヒトの特権性の解除とは、調査や研究のプロセスにおける非人間あるいはモノ

の作用に着目することを意味している。社会学研究と社会調査を、特にその物質的過程に着目しながら、無数の人やモノや制度などの相互作用のフローとしてとらえることによって、ラトールが科学技術実践のフィールドワークによって明らかにしたように、社会的なものに関する学知とそのリアリティが無数の事物の配置と作用によってかたちづくられるプロセスの真相を細部から明らかにしていく道筋が示される。社会学や社会調査の知見は、客観的・中立的なものでも調査者や社会・文化による構築物でもなく、ハイブリッドなものであって、それが社会に存在し受容され、関与していくあり方もまた議論・考察の対象となりうる。

これによって、社会学や社会調査には何ができるかをその細部から具体的に提示する可能性が開かれていく。このことが第2の「調査機械」と第3の「調査・研究のマイクロ政治学」に関わる。「調査機械」がもつ「集合化する (aggregate)」作用を対象化・精査し (SNM: 167)、その「調査機械」の配列がもたらすマイクロ政治学を再帰的あるいは批判的にとらえるだけであれば、これまで社会調査論に照らしてみても、必ずしも新しい知見を打ち出しているとは言いがたい。テクノロジーとしての調査票がもつ作用などはすでに分析がなされているし (佐藤・山田 2008; 佐藤 2011)、調査過程におけるカテゴリー化の権力作用についても多くの指摘がある (好井 2006; 田中・荻野 2007)。リサーチ・アセンブラージ論は、そのマイクロ政治学を「操作化する可能性」を志向するところに特徴と意義がある。すなわち、著者は、物質主義的な存在論に基づいて、サンプリングやデータ収集、データ分析、調査・研究の報告といった各「調査機械」を再設計 (re-engineering) することを提示する (SNM: 168)。例えば、調査・研究の報

告 (reporting research) は、学術における儀礼化された形式による中立的な成果の発表ではなく、リサーチ・アセンブラージ内部での作用を再帰的に明らかにするとともに、ビジュアルなものやアートなどを用いながら聴衆と出来事とを結びつけ、リサーチ・アセンブラージと出来事との相互内行為によるハイブリッドなアセンブラージ生成とそのフローを、より活発化させていくものへと変型される (SNM: 173-4)。こうした志向からは、社会学・社会調査実践の新たな像が結ばれつつあるように思われる¹⁸。だが、それが本書のなかで明確な像を確立しているとは言えないし、リサーチ・アセンブラージ論によって社会調査の権力性をめぐら問題や議論が克服されるわけでもない。実際に調査・研究を積み上げ、具体的に議論していくことで考えていくべきだろう。

7 おわりに

本書を通して、関係論的権力論から出発しつつ、人間のみならず非人間アクターをも情動によりつないでいくことで、自然や社会といった前提を超えていくフローとしてのアセンブラージを対象とした社会学研究が可能であるという視座が開かれた。それぞれの具体的な対象へのインパクトを含めた各章の内容は、非常に魅力的なものだと言えよう。しかしながら他方で、アセンブラージを説明する際の物質性の間をつなぐハイフン (—) に関してはあまり多くの説明がなく、一見したところネットワーク分析のノードをつなぐ「線」と何が違うのか、と首をかきげる人も少なくないだろう。ここでこのハイフンを本書に沿って補足するとすれば、これはアセンブラージ内部の潜勢力——関係化し具現化する権力関係に先行する情動性——の物質

性を抽象的に記号化する作業だと言えよう。このように、まず見えるもの、あるいは安定的な物質性の配置をハイフンでつなぎ、それら関係性の内部で様々な属性を持つ諸情動のフローをローカルレベルで動的にとらえるというのが、著者の最大の試みであり、また最大の批判点となるだろう。他方で、ローカルレベルに焦点化した視座を追求するならば、仮により多数のアクターからなるアセンブラージを検討する場合、この調査方法の原理主義的立場だと、複数のフィールドワーカーを動員した大規模調査を行う必要があるため、研究コストはフローの規模により増大の一步を辿る、という欠点が挙げられよう。それでも限りある人数で、同様の研究手法で調査を行いたい／行わなければならない場合、安定的で持続的なフロー（これはほとんど「構造」という概念が指示する対象なのだろうが）を「抽象的に前提とする」立場を取らざるをえない場合もあるだろう。しかしそうだからと言って、著者の新しい物質主義的 sociology の切れ味が落ちるとは思えない。「システム、構造、階層という抽象的概念を前提としない」という著者の強い1元的存在論は、例えば特定の安定した制度機能的フローは概念的前提とするといった形で、存在論的な原理主義を固持しない形での調査設計に開かれているものとしても受容できるのではないだろうか。そのほうが調査のプラグマティックな側面からみれば合理的である場合が多いだろう。

本稿では第1に、本書が前提とする新しい物質主義の理論的系譜を取り上げ、それがどのような具体的な理論的想像力において展開してきたのかを見た。第2に、新しい物質主義が、いかにして本書の主張する「新しい物質主義的 sociology」として、社会学的理論として、適用可能であるかを紹介した。第3に、研究実践の

レベルにおいて新しい物質主義的社会学がどのように適用可能なかを、事例を列挙する形で考察した。また、その場合の社会学の自己像とその意義について検討し、新たな社会調査と権力論を構想していく可能性を指摘した。

本書において提示された新しい物質主義的社会学は、一方で理論—実践的な志向として存在論的な傾向を強めつつ既存の社会学的前提に対する鋭い批判を提示しながら、具体的な調査対象にどのように取り組んだらよいかを提示している。社会的なものを根底から再考し、巨大で抽象的な概念を出発点とせずより状況的な経験に基づいた、現代社会のダイナミズムに肉薄する可能性が、新しい物質主義的社会学には内包されている。ゆえに評者にとっては、新しい物質主義的社会学の方法論が実際の社会学研究に適用されるなかで様々な批判や限界点が析出され、それが結果として社会的なものを研究する理論と方法に寄与することになるならば、本稿のそれ以上の達成はないと考える。言説や文化の信憑性と持続的安定性が揺らぎつつある現代において、物質性の確からしさが求められつつも、その物質性を通して人間—非人間による情動的フローにより媒介された集合体 (aggregation) としての社会を積極的に分析し、さらにその絶え間ない生産に社会学者として関与していくことの可能性を提示するのが本書である。社会の関係論的で生産的なとらえ方の探究は、開始されたばかりである。

付記

本稿は、「社会と基盤」研究会（研究代表者：町村敬志，科研費基盤研究A，課題番号26245057）における共同研究の成果である。また本稿の執筆分担は次のとおりである。第1節：森が骨子を作成し岩館・植田が加筆、第2

～5節：森、第6節：岩館、第7節：森。

注

¹すでに日本語圏には、new materialism に「新しい唯物論」の訳語を充てたものがある（例えば『現代思想』2015年1月号および6月号など）。しかし本稿では、物質性の側面をより強調するために「新しい物質主義」の訳語を充てる。

²本稿の問題関心の背後には、評者が東日本大震災下の東京を経験するなかで感じた、既存の社会学のアプローチの限界性への感覚がある。すなわち、東京のような大都市に体现される近代的社会空間が実はヒトとモノの複雑な接続のうえに成立すること、そして、ときにヒトの意図通りに制御されないモノの動きが、その近代的社会空間の存立可能性を左右していく事態について、もっぱら人間の世界に焦点化する既存の社会学のアプローチでは十分に迫りえないことを評者らは実感した（こうした問題関心からの研究成果としては、「社会と基盤」研究会による英文電子ジャーナル Disaster, Infrastructure and Society: Learning from 2011 Earthquake in Japan No.6 の特集 Infrastructure Politics (<http://hdl.handle.net/10086/28587>)、および、植田編（2017）を参照）。本書をとりあげたのは、本書の提起する新しい物質主義的社会学に、既存の社会学のアプローチの限界を突破するポテンシャルを予感したことによる。

³以下に記述する著者情報は、2017年12月時点でのものである。いずれも本書の著者紹介に基づく。

⁴ドゥルーズとガタリの著作におけるアジャンスマン (agencement) の英訳で、諸関係の不安定で動的な結合を意味している。

⁵人文地理学者のナイジェル・スリフトらによって展開された理論で、人間の説明、テキスト、イメージなどよりも、出来事、活動、実践に焦点を当て

たアプローチを指す。

⁶ ロッシン・プライドッチによって最も明確に分節化された哲学的立場で、人間と非人間、および自然と文化の連続性を認める立場である。ポスト人間は、これら連続性を反映したアセンブラージュである。

⁷ 日本語圏の文化・社会人類学では、いち早くラトウルら ANT 論者の仕事の受容と批判が行われている。詳細は春日 (2011)、春日編 (2016)、Namba (2017) を参照。

⁸ この点は、英語版の『千のプラトー』の訳者である社会理論家のプライアン・マッサミの序文 (Massumi 1998: xvii) に詳しい。マッサミは、英語での Power = 権力概念は、フランス語では *puissance* と *pouvoir* に分節化されることに注意を促している。マッサミによれば、*puissance* (潜勢力) は潜在的な権力領域が指示され、*ドゥルーズ* により「存在のための能力」、「影響するあるいはされる能力」として定義付けられる。他方、*ドゥルーズ* の *pouvoir* は、フーコー的な権力概念の使用方法に近く、これは「潜在的権力の選択的具現化であり、制度化され再生産可能な権力関係」としてとらえることができるとされている。なお、英語訳では双方とも *power* と訳されているが、文脈により差異は理解可能なものであるとマッサミは述べる。社会学のメディア研究においては伊藤守 (2013) が身体とメディアの情動論を考察し、また社会運動研究では田村・田村 (2016) の社会運動とネット社会の情動についての研究がある。また情動概念は、ガブリエル・タルドに端を発する。タルド心理学から人間のためのアソシエーション探究を丹念に行った仕事として中倉 (2011) がある。

⁹ フロー (flow) は *ドゥルーズ* の由来 (flux) であり、本書でも流動 (flux) と流動性 (fluidity) (SNM: 59) という言葉が使用されており、また情動ない

しは力 (force) の絶え間ない流れ (flow) という意味で本書では使用されている (SNM: 27)。

¹⁰ 著者は上記の他にも、政治学者ジェーン・ベネット (Bennett 2010) の「モノー力 (thing-power)」、ダナ・ハラウェイのポスト人間主義サイエンス・スタディーズ (Haraway 1991, 1997)、プライアン・マッサミの情動の探究 (Massumi 1996) など、新しい物質主義を構成するものとしている (SNM: 22)。

¹¹ *ドゥルーズ* = ガタリ的な比喩で、線形 (linearity) とは対照的に、分岐し、逆転し、結合し、切断するフローを指す。

¹² ここで参照されている *ドゥルーズ* の力 (force) の概念は、基本的にはフリードリヒ・ニーチェのそれ (Macht) を借りているが、差異 (difference) や生成 (becoming) といった概念の使用は *ドゥルーズ* 独自のものである。概して力は、変化あるいは「生成」を生産するすべての能力を意味しており、それら能力と生産物は、物質的、心理的、超自然的、芸術的、哲学的、概念的、社会的、経済的、法的なもの、あるいはそれ以外の他のものである。総ての实在 (reality) は表現 (expression) であり、かつ諸力間の相互行為の結果である。この諸力間のそれぞれの相互行為が「出来事」として顕わになる (Stagoll 2010: 110-1)。

¹³ 日本語圏では、調査とテクノロジーおよび非人間アクターに注目した社会調査史研究を、佐藤健二 (2011) が行っている。

¹⁴ 第3章で自然と文化の二元論的理解が、また第4章で社会階層論が物質主義的に詳細に考察されるため。

¹⁵ 詳しくは Fox and Alldred (2015) を参照。

¹⁶ 「集合的」と「単一的」は、それぞれ *ドゥルーズ* = ガタリの概念である「モルの」と「分子的」に対応する (Deleuze and Guattari 1984: 286-8)

¹⁷ 4-3 で述べたように、著者はこれを *ドゥルーズ* =

ガタリが述べるところの「逃走線」(Deleuze and Guattari 1988: 9)であると述べている(SNM: 86)。

¹⁸ こうした社会学実践に重なるものとして、日本における「アートベース社会学」の研究動向が挙げられる(岡原 2017)。

¹⁹ 評者は、人間エージェンシーの安易な放棄や、この放棄が帰結する大規模ネットワーク的(構造的)な関係性の変化への視座を捨象することがもたらす危険性には自覚的である。都市社会学における現在の国際的議論においては、批判的実在論や政治経済学の立場から、人間エージェンシーの独立変数としての重要性と、構造内部の弁証法的な永続的対立という視点の資本主義分析における

有用性を、アセンブラージ学派(アセンブラージ論ないしはANT論者)が捨象する危険性(例えばフラット存在論)についてすでに厳しい批判が寄せられている(Scott and Storper 2014; Storper and Scott 2016)。他方で、アセンブラージ学派が都市の人間-非人間のアセンブラージをとらえるうえで有効であり、その受容の水準を総合的に評価しようとする動きもある(Brenner, Madden and Wachsmuth 2012)。これらの指摘は重要であり、いくつかの立場には同意するが、他方で批判の争点のが外れな議論も存在すると考える。この点の考察は別項に譲りたい。

文献

- Anderson, B. and P. Harrison, 2010, "The Promise of Non-Representational Theories," B. Anderson and P. Harrison (eds.), *Taking-Place: Non-Representational Theories and Geography*, London: Ashgate, 505-35.
- Ansel-Pearson, K., 1999, *Germinal Life*, London: Routledge.
- Barad, K., 1996, "Meeting the Universe Halfway: Realism and Social Constructivism without Contradiction", L. H. Nelson and J. Nelson (eds.), *Feminism, Science, and the Philosophy of Science*, Dordrecht: Springer Netherlands, 161-94.
- , 2007, *Meeting the Universe Halfway: Quantum Physics and the Entanglement of Matter and Meaning*, Durham: Duke University Press.
- Barrett, M., and M. McIntosh, 1982, *The Anti-Social Family*, London: New Left Books.
- Bennett, J., 2010, *Vibrant Matter: A Political Ecology of Things*, Durham: Duke University Press.
- Beckman, F., 2011, *Deleuze and Sex*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Berger, P. L., and T. Luckmann, 1971, *The Social Construction of Reality*, Harmondsworth: Penguin Books.
- Berger, P., and H. Kellner, 1964, "Marriage and the Construction of Reality: An Exercise in the Microsociology of Knowledge," *Diogenes*, 12(46): 1-24.
- Best, S., 1995, "Sexualizing Space," E. Grosz and E. Probyn (eds.), *Sexy Bodies*, London: Routledge, 181-94.
- Blackman, L., 2012, *Immaterial Bodies: Affect, Embodiment, Mediation*, London: Sage.
- Bonnell, V. E. and L. Hunt, 1999, "Introduction," V. E. Bonnell and L. Hunt (eds.), 1999, *Beyond the Cultural Turn*, California: University of California Press.
- Bourdieu, P., 1990, *In Other Words: Essays Towards a Reflexive Sociology*, Cambridge: Polity.

- Braidotti, R., 2006, *Transpositions*, Cambridge: Polity.
- , 2011, *Nomadic Theory*, New York: Columbia University Press.
- , 2013, *The Posthuman*, Cambridge: Polity.
- Brenner, N., D. J. Madden and D. Wachsmuth, 2012, “Assemblages, Actor-Networks, and the Challenges of Critical Theory,” N. Brenner, P. Marcuse and M. Mayer (eds.), *Cities for People, not for Profit: Critical Urban Theory and the Right to the City*, 117-37.
- Bryant Levi R., N. Srnicek and G. Harman (eds.), 2011, *The Speculative Turn: Continental Materialism and Realism*, Melbourne: re.press.
- Butler, J., 1990, *Gender Trouble*, London: Routledge. (=1999, 竹村和子訳, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
- Callon, M., 1986, “Some Elements of a Sociology of Translation: Domestication of the Scallops and the Fishermen of Saint Brieuc Bay,” J. Law (ed.), *Power, Action and Belief: A New Sociology of Knowledge?*, London and Boston: Routledge and Kegan Paul, 196-233.
- Clough, P. T., 2004, “Future Matters: Technoscience, Global Politics, and Cultural Criticism,” *Social Text*, 22(3): 1-23.
- , 2008, “The Affective Turn: Political Economy, Biomedicine and Bodies,” *Theory, Culture and Society*, 25(1): 1-22.
- Coleman, R. and J. Ringrose, 2013, “Face Race,” R. Coleman and J. Ringrose (eds.), *Deleuze and Research Methodologies*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 35-50.
- Connolly, W. E., 2011, “The Complexity of Intention,” *Critical Inquiry*, 37(4): 791-8.
- Coole, D. H. and S. Frost, 2010, “Introducing the New Materialisms,” D. H. Coole and S. Frost (eds.), *New Materialisms: Ontology, Agency and Politics*, London: Duke University Press, 1-43.
- Crenshaw, K., 1989, *Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminism Critique to Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics*, University of Chicago Legal Forum, 139-67.
- DeLanda, M., 2006, *A New Philosophy of Society*, London: Continuum. (=2015, 篠原雅武訳, 『社会の新たな哲学——集合体、潜在性、創発』人文書院.)
- Deleuze, G., 1988, *Spinoza: Practical Philosophy*, San Francisco: City Lights.
- Deleuze, G., and F. Guattari, 1984, *Anti-Oedipus: Capitalism and Schizophrenia*, London: Athlone.
- , 1988, *A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia*, London: Athlone.
- Durkheim, E., 1976[1915], *The Elementary Forms of the Religious Life*, London: Allen and Unwin.
- Foucault, M., 1976, *Birth of the Clinic*, London: Tavistock.
- , 1979, *Discipline and Punish*, Harmondsworth: Peregrine.
- , 1980, “The Eye of Power,” Colin Gordon (ed.), *Power/Knowledge: Selected Interviews and Other Writings 1972-1977*, Brighton: Harvester Press, 146-65.
- , 1981, *The History of Sexuality Vol.1: The Will to Knowledge*. Harmondsworth: Pelican.
- , 1982, “The Subject and Power,” *Critical Inquiry*, 8(4): 777-95.
- , 1990, *The Care of the Self (Vol.3 of the History of Sexuality)*, Harmondsworth: Penguin.
- Fox, N. J., 2005, “Cultures of Aging in Thailand and Australia (What Can a Aging Body Do?),” *Sociology*, 39(3): 501-18.

- , 2016, “Health Sociology from Post-Structuralism to the New Materialisms,” *Health*, 20(1): 62-74.
- Fox, N. J. and P. Alldred, 2014, “New Materialist Social Inquiry: Designs, Methods and the Research-Assemblage”, *International Journal of Social Research Methodology*, 18(4): 399-414.
- , 2015, “Personal Health Technologies, Micropolitics and Resistance: A New Materialist Analysis,” *Health Sociology Review*, 20(4): 359-71.
- , 2017, “Mixed Methods, Materialism and the Micropolitics of the Research-Assemblage,” *International Journal of Social Research Methodology*, latest articles: 1-14.
- Freund, P. E. S., 1990, “The Expressive Body: A Common Ground for the Sociology of Emotions and Health and Illness,” *Sociology of Health and Illness*, 12(4): 452-77.
- Game, A., 1991, *Undoing the Social*, Buckingham: Open University Press.
- Gell, A., 1998, *Art and Agency: An Anthropological Theory*, London: Oxford University Press.
- Giddens, A., 1981, *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, London: Macmillan.
- , 1982, *The Transformation of Intimacy*, Cambridge: Polity.
- Graham, S., 2009, “Cities as Battlespace: The New Military Urbanism,” *City*, 13(4): 383-402.
- Grosz, E., 1994, *Volatile Bodies*, Bloomington: Indiana University Press.
- Guillaume, L. and J. Hughes, 2011, *Deleuze and the Body*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Hall, S., 1996, “New Ethnicities”, D. Morley and K-H. Chen (eds.), *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*, London: Routledge, 422–51.
- Haraway, D. J., 1991, *Cyborgs, Simians and Women*, London: Free Association Books.
- , 1997, *Modest_Witness@Second_Millennium: FemaleMan_Meets_OncoMouseTM*, New York: Psychology Press.
- Henriques, J., W. Hollway and C. Urwin, et al., 1998, *Changing the Subject: Psychology, Social Regulation and Subjectivity*, London: Routledge.
- 伊藤守, 2013, 『情動の権力 = The Affective Power: メディアと共振する身体』せりか書房.
- Jasper J.M., 2011, “Emotions and Social Movements: Twenty Years of Theory and Research”, *Annual Review of Sociology*, 37: 285-303.
- 春日直樹編, 2011, 『現実批判の人類学 —— 新世代のエスノグラフィへ』世界思想社.
- , 2016, 『科学と文化をつなぐ —— アナロジーという思考様式』東京大学出版会.
- Latour, B., 1992, *We have Never Been Modern*, Cambridge: Harvard University Press. (=2008, 川村久美子訳, 『虚構の「近代」 —— 科学人類学は警告する』新評論.)
- , 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford: Oxford University Press.
- Lemke, T., 2012, *Foucault, Governmentality, and Critique*, New York: Paradigm Publishers.
- , 2015, “New Materialisms: Foucault and the ‘Government of Things’,” *Theory, Culture and Society*, 32(4): 3–25.
- Leys, R., 2011, “The Turn to Affect: A Critique”, *Critical Inquiry*, 37(3): 434–72.
- MacKinnon, C.A., 1982, “Feminism, Marxism, Method, and the State: An Agenda for Theory,” *Signs*, 7(3): 515-44.
- Marx, K., 1959, *Economic and Philosophic Manuscripts of 1844*, Moscow: Progress.
- Massumi, B., 1988, “Translator's Preface: Pleasures of Philosophy”, *A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia*,

- London: University of Minnesota Press, v-xv.
- , 1996, “The Autonomy of Affect,” P. Patton (ed.), *Deleuze: A Critical Reader*, Oxford: Blackwell, 217-39.
- McFarlane, C., 2011a, “On Context: Assemblage, Political Economy and Structure,” *City* 15: 375-88.
- , 2011b, “Assemblage and Critical Urbanism,” *City* 15: 204-24.
- Mills, C.W., 2000[1959], *The Sociological Imagination*, New York: Oxford University Press.
- Mulcahy, D., 2012, “Affective Assemblages: Body Matters in the Pedagogic Practices of Contemporary School Classrooms,” *Pedagogy, Culture and Society*, 20(1): 9-27.
- Mulkay, M. J., 1985, *The Word and the World: Explorations in the Form of Sociological Analysis*, Allen and Unwin.
- 中倉智徳, 2011, 『ガブリエル・タルド —— 贈与とアソシアシオンの体制へ』 洛北出版.
- Namba, M., 2017, “Becoming a City: Infrastructural Fetishism and Scattered Urbanization in Vientiane, Laos,” P. Harvey, C. B. Jensen and A. Morita (eds.), *Infrastructures and Social Complexity: A Companion*, London: Routledge, 76-86.
- 中川理, 2011, 「どうとでもありえる世界のための記述 —— プラグマティック社会学と批判について」, 春日直樹編, 『現実批判の人類学 —— 新世代のエスノグラフィへ』 世界思想社, 74-94.
- Nash, K., 2001, “The ‘Cultural Turn’ Social Theory: Towards a Theory of Cultural Politics,” *Sociology*, 35(1): 77-92.
- Nigam, A., 1996, “Marxism and Power,” *Social Scientist*, 24(4/6): 3-22.
- 岡原正幸, 2017, 「アートベース社会学へ」, 『哲学』, 138: 1-8.
- Parker, I., 1992, *Discourse Dynamics: Critical Analysis for Individual and Social Psychology*, London: Routledge.
- Parsons, T., 1951, *The Social System*, New York: Free Press.
- Potts, A., 2004, “Deleuze on Viagra (Or What Can a Viagra-Body Do?),” *Body and Society*, 10(1): 17-36.
- Rojek, C. and B. Turner, 2000, “Decorative Sociology: Towards a Critique of the Cultural Turn,” *The Sociological Review*, 48(4): 629-48.
- Rose, N. S., 1999, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self*, London: Free Association Books.
- , 2007, *The Politics of Life itself: Biomedicine, Power and Subjectivity in the Twentieth-first Century*, Princeton: Princeton University Press.
- Saldanha, A. and J. M. Adams, 2012, *Deleuze and Race*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 佐藤健二, 2011, 『社会調査史のリテラシー —— 方法を読む社会学的想像力』 新曜社.
- 佐藤健二・山田一成編著, 2008, 『社会調査論』 八千代出版.
- Scheff, T. J., 1994, *Microsociology: Discourse, Emotion, and Social Structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- Scott, A. J., and M. Storper, 2014, “The Nature of Cities: The Scope and Limits of Urban Theory,” *International Journal of Urban and Regional Research*, 39 (1): 1-15.
- Shalin, D. N., 1990, “The Impact of Transcendental Idealism on Early German and American Sociology,” *Current Perspectives in Social Theory*, 10(1): 1-29.
- Spinks, L., 2001, “Thinking the Post-Human: Literature, Affect and the Politics of Style,” *Textual Practice*, 15(1): 23-46.
- Stagoll, C., 2010, “Force,” A. Parr (ed.), *The Deleuze Dictionary*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 110-1.
- Storper, M., and A. J. Scott, 2016, “Current Debates in Urban Theory: A Critical Assessment,” *Urban Studies*, 53(6): 1114-36.
- 田村貴紀・田村大有, 2016, 『路上の身体・ネットの情動 —— 3.11 後の新しい社会運動: 反原発、反差別、そして

て SEALDs』青灯社.

田中耕一・荻野昌弘, 2007, 『社会調査と権力—— <社会的なもの>の危機と社会学』世界思想社.

Thacker, E., 2005, “Biophilosophy for the 21st Century,” A. Kroker and M. Kroker (eds.), *Critical Digital Studies, a Reader*, Toronto: University of Toronto Press, 132-42.

Thrift, N., 2004, “Intensities of Feeling: Towards a Spatial Politics of Affect,” *Geografiska Annaler Series B Human Geography*, 86(1): 57–78.

植田剛史編, 2017, 『マテリアリティの政治と「インフラ論的転回」—— 社会の近代性を支えるヒト - モノへの問い』愛知大学人文社会学研究所 2016 年度ワークショップ報告書, 愛知大学人文社会学研究所 (https://aichiu.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=917&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=17).

Van Krieken, R., 1991, “The Poverty of Social Control: Explaining Power in the Historical Sociology of the Welfare State,” *The Sociological Review*, 39(1): 1-25.

Williams, S. and G. Bendelow, 1996, “Emotions, Health and Illness: The ‘Missing Link’ in Medical Sociology?” V. James and J. Gabe (eds.), *Health and the Sociology of Emotions*, London: Routledge, 25-53.

好井裕明, 2006, 『「あたりまえ」を疑う社会学—— 質的調査のセンス』光文社新書.

Youde, D., and F. Armstrong, 2011, “A Politics Beyond Subjects: The Affective Choreographies and Smooth Spaces of Schooling,” *Emotion, Space and Society*, 4(3): 144-50.

(もり けいすけ、日本学術振興会・国際基督教大学、kemor@outlook.com)
(いわだて ゆたか、NPO サーベイ・文京学院大学ほか、iwate.yutan@gmail.com)
(うえだ たけふみ、愛知大学、t.ueda127@gmail.com)
(査読者 中倉智徳、牧野智和)